特500
619

アルチバーシフ原作
原田譲譯

サアニン

榎本書店發行

始

昭.14.12.30 十

函
風 69
號
永久保存

禁風1 ~~19~~ 特500-619

サ

ア

ニ

ン

一

ウラジミル、サアニンは彼れの生涯の最も大切な時期――人間の性格が自然と人に接して出來上るところの――を、遠く家族と離れて過した。何人にも監督されず、自由に、持つて生れた心のまゝに、それは怜度野に立つ一本木のやうに獨立して成長した。

數年の間家を外にして歸つた彼れを、彼れの母親や妹のリダは今少しのところで誰だか見境がつきかねた位ゐ彼れは變つてゐた。成程、顏立や、聲や、彼れの擧動にはこれと言つて違つたところはなかつたが、何となく氣品が備はつて、彼女達が曾つて見たことのない新らしい表情が、彼れの容貌を別人のやうにしてゐたのである。

家に到着したのは夕暮前であつた。落付はらつて、さも、五分間ばかり家を留守にしてゐた許りだといつた風に、彼れはユッタリと部屋へ這入つて來たのであつた。丈の高い、肩幅のいかつ

い、茶褐色の艶々しい頭髪、その顏の物靜かな表情、それらの何處にも、少しの疲勞も、感動も見られなかつた。彼れの冷靜さは妹のリダや母親の、彼れを歡び迎へたための大騒ぎを自らにして打ち消してしまつた。

彼れが食事をしてゐる間、リダは彼れと向ひ合せに腰をかけて、熱心に兄の顏を見戍つてゐた彼女は强く兄を慕つてゐたのであつた。それは情熱の高い、年若な娘が、家を外にしてゐる兄弟を慕ふ場合にのみ見られる、美しい感情のあらはれであつた。リダは、個性の最も著しい、一偉丈夫として兄を描いてゐた。この考へは、彼女が讀んださまゞゝな書物から組立てられた夢であつた。が、彼女は兄の生涯から悲劇的葛藤や、爭鬪や、苦悶や、それらの物からうける孤獨の淋しさを見出したいと思つてゐた。

『何故そんなに僕を見るんだい。』

サニンはほゝ笑み乍ら訊ねた。そのほゝ笑はそれ自ら美しくもあれば思ひやり深いものであつたのに、不思議とリダには氣に入らぬものだつた。何故といつて、兄の微笑からは、彼女の望んでゐた、戰鬪や苦悶や淋しさの蔭が少しも見られなかつたからである。

リダは目をそらして、兄の質問には答へないで、物思はしい樣子で、傍にあつた書物の頁をめくるのであつた。

食事が終ると、母親は待ち兼ねてゐたかのやうに、サニンの頭髪を撫で乍ら、親しい調子で尋ねた。

『ね、話してお聞かせ。どんな暮し方をしてゐたの?』

『僕が何をしてゐたかつて』

サニンは相變らず明るい微笑を齎らし乍ら言つた。

『食つたり、呑んだり、寢たり……時々は仕事もやりましたがね。何もやらない時もありました……』

彼れは初めのうちは、自分の事を話すのを好まないらしかつた。が、母親が根掘り葉掘り尋ねかけるので、遽ては自分から乘氣になつて話すらしかつた。しかし、自分の話が相手にどんな氣持を與へやうと、そんな事には更にお構ひなしといつた風だつた。成程彼れは親切で物柔しくはあつたが、彼れの樣子には、肉親の間に無くてはならぬ筈の、溫味といふものが全々缺けてゐた。

彼等は、庭へ下りロのバルコニーへ出て、そこに腰をかけた。もう夕暮で、物穏やかな陰は彼等を取圍いてゐた。サニンは巻煙草に火を默け、そして物語つた。

人生がどんなに自分を苦しめたか、何もしないでゐた事、屢々飢死せねばならないやうな破目に陷つた事、如何に政治上の爭鬪に煩はされたかを彼れは語つた、そして夫れが面倒臭くなつて來たので抛棄した事などをも彼れは物語つた。

身動きもせず聽き耳を立てゝゐた。リダの姿には、恰かも夏の夕べのあらゆる處女に見られる異常な美しさがあつた。

聽いてゐるにつけて、リダの胸には、一種特別のものゝやうに描いてゐた兄が、實は極めて單純で曾つ平凡な人物であつたやうに思はれて來るのだつた。兄はたゞ、行きあたりばつたり、働らいたり怠けたりしてゐたので、酒も可成飲むらしい樣子でもあれば、多くの女に接してゐるらしくもある。そして空想勝な彼女が熱望してゐるところの、暗い、重々しい運命は、兄の語る生活の中から發見され相もないのであつた。偉大な理想——兄は少しもそれを持つてゐない。兄は何人をも憎んだでもなければ、何人のために苦んだのでもありはしない。

『おや、兄さんは針仕事まで御存じなの?』

リダは語中に口を入れて尋ねた。顏を顰めて。忌々しい調子で。男が針仕事をするなぞ、彼女には頗る非英雄的なものであつたから。

『必要に迫られて覺えたのさ。』

サニンは例の微笑を漂せて答へた。妹の心を看取したのである。

母親も妹娘と同じやうに、或物淋しい感じを覺えた。彼女は、自分の息子が社會的に何等の地位も占めてゐないのが——占めやうともしなかつたのが情けなく思はれたのであつた。彼女は、何時迄もこんな調子では仕樣がない。何とか身の括めくゝりをつけるやうにせねばならぬと、息子の機嫌を損ねはしまいかと心配しい〳〵かう言つた。が、彼れが一向柳に風で聞き流してゐるので、仕舞には腹を立ててしまつた。息子は故意に自分を嘲弄してゐるのだと思つた彼女は、頑固婆一流の小言をひつうこく繰返して止まなかつた。

サニンは別に驚ろくでもなければ、怒つたでもなく、平氣な顏付で母親を眺めて默つてゐた。

『それで、お前はどうして生きて行く考へだね。』

と問はれたのに對して

『さあ、どうにかして……』

と無頓着に答へた。その確乎した落付のある様子は、母親には何も解らなかつたであらうが、遠大な、ある深い意味のこもつてゐる事は、眉をも動かさぬ、澄みきつた瞳のうちに瞭然と讀まれてゐた。

マリア、イワノヴナ（母親）は、烏渡おし默つたが、悲し相な口調で

『もうお前も子供ではないからね……それはさうと、お前達は庭でも散歩したらどう。』とつけ足した。

『左樣だね、リダ、お前庭の案内をしてくれないかね。』

リダは默想から我に返つた。そして吐息と共に立上つた。

二人は小徑を木立の深みへと歩るいて行つた。

庭は、下りると川に續き、川の對岸には野が展けてゐた。此家は昔さる貴族の住宅で、荒れ放

題に荒れた廣大な庭園は、ひつそりとして、夜になると、鬼氣が横行してゐるやうな薄氣味惡さが潜んでゐた。

唯一條の並木道——それさへ落葉の腐蝕したのや、枯れた小枝などで一面に蔽はれてゐて、歩を運ぶ度に、蛙の群がとび出したり、踏み潰されたりするのだつた。

木立の綠葉の彼方へと母家が見えなくなつた時だつた。サニンは出抜に妹を肩越しに抱きかゝへ、一種、愛撫の奥に威嚇をもつた聲で囁いた。

『お前は何と美しくなつたことか。お前に始めて身を委せられる男は仕合者だ。』

鋼鐵のやうに力强い兄の腕から、稻妻の如きものがリダの躰に流れこんだ。

彼女は驚ろいて、恰かも目に見えぬ猛獸が近寄つたかのやうに、わな〳〵と身を慄はせてとび退つた。

サニンは彼女を離れた。そして、兩手である枯枝を折りとりざま、それを水面に投げつけた。波紋は八方へ擴つて、葦の葉頭を顫かせ、軈て消えた。恰かもサニンへ何か秘密な合圖を示し合せたかのやうに。

二

午刻であつた。

光波と靜かさと、暑さが庭園に滲み漂つてゐた。

マリア、イワノヴナは苺の砂糖漬を拵へてゐた。美味相な匂ひは四邊を立て罩めてゐた。

サニンは朝のうちから花壇の手入にかゝつてゐたが、軈て手を洗ひに建物の方へ行き、戻ると柳製の編椅子を、食卓近く持ち出して、ゆつくりとそれに腰を下した。

彼れは爽快な氣持であつた。木立の緣、太陽と青空——之れらのものは彼れの胸にのび〳〵とした幸福を味はせた。

喧擾な大都會——そこにあるあはたゞしい生活が、現在の彼れには嘔吐を催す種であつた。現在彼れの周圍にあるものは、太陽と自由のみである。そして、將來についての考慮は、彼れには必要がなかつた。

サニンは眼を細くとぢ、さも愉快相に健康な筋肉を伸したり縮めたりした。

息子の暢氣さがマリア、イワノヴナには氣に入らなかつた。彼女は他の子供達と同じ樣に彼れを愛してゐた。愛してゐればこそ彼女は腹立しかつた。息子が泰然とおさまり返つてゐるのを、無茶苦茶からでも說伏してやりたくて堪らない衝擊に彼女はいら〳〵してゐるのであつた。

『ねえ、何時のやうに遲くなるかしら?』

彼女はむつとした口調で、さも熱心に鍋の中を眺める素振を裝つた。

『遲くなる? 何のことです。』

サニンはかう折返して噴嚏をした。

マリア、イワノヴナは、息子が噴嚏をしたのは、故意と自分を怒らせるためからであるやうに思つた。さう思ふのは、勿論思ふ方が惡いには違ひないが、その爲めに彼女は、一層氣を惡くした。

『家は全く好い處だ。』

と、サニンは獨言のやうに言つた。

『惡くはなからうさ。』

マリア、イワノヴナは皮肉に答へた。
『お母つさんが愚痴を言つて、僕を五月蠅がらせないと一層い、處なんだが。』
恁う言つたサニンの言葉付が如何にも物靜かであつたので、母親は怒つてい、のか、笑つてい、のか解らなかつた。で、彼女は言つた。
『お前は子供の時とは人間がすつかり違つて來て……今では……』
『今では?』
サニンは何か非常に興味ある事を待ち構へるかのやうに折返した。
『今では……立派な大人になつたよ。』
『へえ、それは結構だ。』
と、彼は微笑したが、『おや、ノキユヴ君がやつて來るぞ。』
母家の方から脊の高い、ブロンドの髪をした、立派な好男子があらはれた。や、肥つてはゐるが、申分のない頑丈な體に赤い絹のルバーシカをつけた、碧い眼をした青年は、溢れるやうに日光を浴び乍ら、遠くから聲をかけた。

『何の事です。貴下方は何日でも口喧嘩ばかりしてゐて……』
『僕の鼻がギリシヤ式に堂々としてゐるつて、お母つさんが恁う仰有るんだがね。』
サニンは笑ひ乍ら、ノキコヴの手を柔らかく握つた。
『何を言つてゐるのだか……』
母親はぷん〳〵聲で叫んだ。ノキコヴは快濶に笑つて言つた。
『全くだ、誰もが君の一身上については心配してゐる。』
『早速あれだから堪らん。』
サニンはおどけて、然し體裁惡い樣子であつた。『君までが母と一緒になつて酷めたのぢや、僕は逃出すとしよう。』
『いゝえ、妾はごきませうよ。』
母親は忌々し相に竈から鍋をはずすと、傍目も振らず母家の方へ退却した。
『君、お母つさんを揶揄のは止し給へ。お母つさんはもうい、年ぢやないか。』
ノキコヴは優しく友に忠告した。

『僕が……』

『僕がぢやない、萬事が君は左樣ぢやないか。』

『母親の方から、何の彼のつて僕に當り散らすんだよ。僕は何んにも要求しない代りに、誰からも關渉されたくない迄さ。』

沈默が二人の上に落ちた。

『一向詰らない——』

やゝあつて、別のことを考へてゐたノヰコヴは、唸るやうにかう言つた。

『何がさ。』とサニン。

『何も彼も……一體に退屈で仕方がない。僕はこんな片田舍の町に飽が來たのだ。つまり何をやつていゝか解らなくなつてしまつたんだね。來る日も〳〵患者の脈を見たり、處方箋を書いたり……人間にはもつと他の生活がある筈だ。』

『一體何が君に不足なんだらう？　君は若くて、美男子で、體は達者だし……君がつまらないと思ふのは、リダがまだ君に惚れてゐないからさ。たゞそれつきりさ。ごうだい、圖星を指れたらう。』

サニンは愉快相に眼を輝やかした。

『馬鹿な！　君は何て馬鹿な事を言ふんだらう。』ノヰコヴは眞赤になつて叫んだ。

『ごうしてこれが馬鹿なんだ。君はリダの事で足の爪先から頭の天頂まで一ぱいになつてゐるぢやないか。それでも君はまだ馬鹿と言ふんだね。』

ノヰコヴは默つて眼を逸らした。彼れはリダを一種神聖なもの、やうに見做してゐた。彼女に對する深い〳〵懷かしさを持つてゐたノヰコヴであつたから、今サニンから彼女のことを言はれても腹を立てる譯にはゆかなかつた。彼れの心は苦しさと嬉しさが錯綜して、ろくに返す言葉もない有樣であつた。

この時、愛犬のミルが、何處からともなく走り寄つた。そしてサニンの膝にその背を摺りつけ何か喜ばしい事のあるのを彼等に知つて貰ひたい樣子であつた。

と、すぐその後から若々しい女の笑ひ聲と共に、木立の彼方からリダの姿があらはれた。彼女の後には、ピカ〳〵する長靴をはき、鞣皮のついた騎兵ズボンを履けた二人の若い士官が從つて

るた。拍車がカツ〳〵と堅い響きを立てゝゐた。

士官の一人はサルウヂンといふ騎兵大尉で、リダに執拗く戀想してゐるのをサニンは既に感知してゐた。他の一人はタナロフといふ中尉で、サルウヂンを軍人の典型とし、何事によらず彼れにあやかりたいと思つてゐる男であつた。

リダはノキコヴに手をさしのべた。彼れはその手を握り返した。そして涙がうかぶ程眞赤になつた。しかしリダは彼れを氣にも留めなかつた。彼れのおど〳〵しい眸は昔からのことなので、彼女はそれに慣れきつてゐるせいか、最早そこから動かされる何ものも掬取することは出來なかつたのである。

『皆さん、夜食まで散歩しない？　川の方へ行かうではありませんか。今頃は恰度、あそこん所何ともいへないゝ景色なんですのよ。』

リダは愉快相に言つた。

すぐ賛成したのはサルウヂンであつた。『結構ですね。』彼れはかう言つて拍車を鳴らした。

『僕も一緒に願ひたいものですね。』

と言つたノキコヴの顏は泣き出さない許りであつた。

『貴方が行つては不可つて誰が言ひましたの？』

リダは自分の肩越に、微笑し乍らノキコヴに言つた。

『行き給へ。一緒に行き給へよ。』

サニンは彼れに勸めた。そして『リダが僕を兄妹だと思つて呉れなかつたら、僕だつて一緒に行くんだがね。』

リダは不意にドキッとして、落付のない忙しげな眸でチラッと兄の心を讀まうとしたが、急にまた、短い神經的な笑ひに紛らはしてしまつた。

サニンは薄笑ひを殘して、一人で母家の方へ立ち去つて行つた。そして寢臺に横はると、基督教の運命、ねれが歴史に演じた立場といつたやうなことについて、取止めもない考察に耽つてゐるうち、何時の間にか假睡んだ、夕刻までぐつすり眠込んでしまつたのであつた。

三

四名の者が散歩から戻つてきた時もう四邊は暗くなつてゐた。

リダは、そわ〳〵と嬉し相にして母親の傍へ駈け寄ると

『お母つさん、夕飯にしませう。』と、その袖を引いて

『でね、お仕度が出來るまでドルドル、セルゲイエキツチさんが何か彈いて下さるのよ。』

マリア・イワノヴナは食事の仕度に行つた。そして彼女は、リダのやうに快濶で可愛らしい娘が、幸福でない譯がない、と歩るき乍ら考へた。

二人の士官は部屋へは入ると、眞直にピアノの方へ行つた。リダは搖椅子に身を沈めて樂々とした姿正を取つた。

ノキコヴは、リダのゐる、踏みしめると板の軋む音のするベランダを、彼方此方と歩み乍ら、そつと彼女の横顔を見しい〳〵してゐた。彼れは彼女のひき緊つた柔らかい咽喉を見た。その黑い靴下や黄ろい小さな靴を見た。リダはしかし彼れのぬすみ見には氣がつかないでゐた。漸やく

少女期を脱しようとする若い女の、故知らぬ恍惚とした情熱に、彼女は瞼を閉ぢて、謎のやうな一人笑みをもらしてゐるのであつた。

ノキコヴの胸は恰かも戰場のやうであつた。彼れはリダを戀してゐた。けれども、リダは自分を何う思つてゐるのか、更に見當がつかなかつた。愛してゐてくれるやうにも考へられ、ば、愛してくれてゐないやうにも考へられる。あの若々しい肉體が、すつかり自分に打ち委されるのが目の前にぶら下つてゐるやうに思はれるかと見れば、愛されてゐるかどうか疑はしい時には、さうした考へ――肉慾のみの妄想に奔る自分が――は、此上もなく恥かしく卑猥な、自分自身を實に見下げはてた、リダに相等する人間でないものに思はれるのであつた。

ノキコヴは、かうした考へに惱まされ乍ら、軈て心の中に頷いた。

『若し右の足がベランダの端板を踏んだら、リダが承諾する占ひだ。がしかし……左の足だつたら……』

そして彼れが最後の板敷を踏んだのは左の足であつた。冷めたい汗が脇下を流れた。が、彼れはすぐかう獨言つた。

『何だ馬鹿々々しい。こんな偶然の結果があてになるものか。左様だ、一二三……三で斷然彼女に言ひ寄るんだ。しかし、ざう言つたらい、かしら？え、！その場になつたら口の方で何ごか言つて呉れるだらう……一……二……三……ごうもいけない。三度目勝負だ。一……二……三……一……二……三……一……二……

彼れの頭腦は炎のやうに燃え、胸ご足は意地氣なくわい〳〵ご震へた。

『足音を立てるのは止して頂戴。』

リダは瞳を開らいて彼れに言つた。『ピアノが聽えぬぢやありませんか。』

ノキコヴは溜息を吐いた。

『音樂がお嫌ひなら、お月樣でも見ていらつしやいな』

ご、彼女は言つた。

『それよりか貴女の方が……』彼れはかう口走つたすぐ後で『何て拙い言ひ草だ。ごうして俺はこんなに下手なんだらう。』

『大變な御挨拶ね。』リダは朗らかな聲で笑つた。

『挨拶ぢやありません。』

『そんなら、後生だから默つてゐて頂戴。』

ご、リダは忌々し相に肩を搖つた。

……

その愛こそは永久の生命ぞ……

樂の音は水晶を迸らせるやうに四邊の空氣に響きわたつた。月光はいよ〳〵冴えて、樹綠はいよ〳〵濃くなつた。

下では、サニンが草原を一人で歩るいてゐた。彼は菩提樹の許に佇んで、醉心地にぢつごして動かうごもしなかつた。

今打ちああけねば……ノキコヴは決心した。

『リダさん。』

彼れの聲は震へのために醜く嗄れてゐた。

『なあに——』

リダは殆んど反撥的に訊ね返した。
『ずつと前からのことです……僕は貴女に聞いて戴きたいと思つてゐました……』
サニンはその方へ耳を欹てた。
『え、？』
リダは輕い調子で訊ねた。
『僕は……僕は……その……貴女は、その何です、僕の妻君になつて下さいませんか。』
そして彼れは言葉を言ひ終らない前に、何といふ恥知らずを喋り出してしまつたものか！ と赫ツと上氣してしまつた。
『奥様――誰方のですの？』
かう言ふと同時に、彼女の頰は眞赤に染つた。リダはおそろしく狼狽して、無意識に立ち上つた。月は外面を向いた彼女の顏を眞面に射た。
『僕は……貴女に戀して……そのごう申上げたらいゝか……非常に』
『非常に』なんて、俺はごうしてあんな文句を使つたのだらう。統てが絶望だ、

リダにとつて、彼れの今の言葉は、全く豫期せぬこころのものであつた。と同時に無益でもある……彼女は狼狽した。彼女は彼れを親籍の者のやうに考へて、決して愛してゐないのではなかつたが、今、彼れがこんな事を口にしたために、二人の間に深い取戻のつかぬひびが出來てしまつた。リダはそれを怖れた。
『妄、ごうしませう。そんな事は考へて見たことすらないんですもの。』
ノキコヴは帽子を攫むと突然立ち上つた。彼れの顏は布のやうに眞青であつた。
『左様なら。』
『おや！』
リダは慌てゝ手をさし延べた。ノキコヴはその手を急いで握り返すと、帽子を鷲掴みにしたまゝ、露に濕つた草原を一文字に走り去つた。そして物の蔭に來るや否や、彼れは自暴的に髪毛を掻き拐つた。
――嗚呼、俺は何て不幸な男だ。いつその事ズドンと一發米噛みを撃ち拔いて呉れやうか……これ程恵まれない、これ程恥晒しな……畜生！ 馬鹿！ 馬鹿！』

嵐のやうなものが、狂暴に、素まじい速度をもつて彼れの腦裡を驅けめぐつた。

サニンは友の後を追はうこしたが、不意に思ひ止つて冷かに笑つた。ノヰコヴが狂氣のやうに髮毛を搦りまはつて、失戀に悶え苦しんでゐるであらう相像が、彼れにはい・氣味であつたのだそれから又、自分の美しい妹が、ノヰコヴを愛してゐない事が、彼れには滿足でもあつた。

リダは、化石したやうに立ちつくしてゐた。月光のもこに、白く鮮やかに刻み出された妹の立姿を、サニンは瞬きも打たず仰いでゐた。

こ、部屋からサルウヂンがあらはれた。彼れはタナロブが彈いてゐるワルツの樂音に足音を紛らはし乍ら、忍びやかに接近するこ、柔らかにリダを抱いた。こ同時にサニンは、二つの影が一つの塊こなつて月の下にゆらぐのを認めた。

『何を考へていらつしやるの?』

サルウヂンは、彼女の小さな可愛らしい耳朶に唇をおしつけて甘く囁いた。

リダは、ひし〳〵こ抱擁されるにつれて、一種不思議な、物怖ろしい、それでゐて恍惚こなる感覺に脅かされた。彼女はサルウヂンが智識の點に於ても、修養の點に於ても、自分以下な人間

であるのをよく知つてゐた。それ故決して彼れに屈從しないこ強く意識してゐ乍らも、逞ましく美しい男に自分の躰を觸れさせてやるこいふ氣持は快ろよい、身ぶるひづく感情であるのを覺えた彼女は深い溪谷に、兩の手を高く天にのばしざま、身を躍らせて飛び込むやうな氣がした。妾さへさう思へば………さうしようこ思へば………今この塲からでも………こ彼女は思つた。

『人が見てゐるも、屹度。』

リダはかう幽かに囁いたが、敢て彼れから身を退けやうこするでもなく、男のなすがま丶に任せてゐた。

『一言………ほんの一言………』

こ、サルウヂンは全身の血汐を情熱に沸らせて、口吃り乍ら『來て下さる? ね。』

『何故ですの?』

リダは月を仰いで、殆んご囈言のやうに言つた。

『何故つて………思ひだけ貴女こお話がしたいからです。ね、來て下さるでせうね。リダさん』

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

『い、わ、行きますわ。』

かう囁くと共に、リダはよろめかしい足調で母家の方へと引き返して行つた。彼女は、何かしら怖ろしいものの、免れ難い誘惑に牽引されて、底知れぬ淵へと引摺られつゝある自分であるやうな恐怖を感じた。

――なあに、何でもない人だわ。妾は唯ちつと冗談に不座戯て見ただけなんだわ。面白くて滑稽だつたから迄の話だわ。――

彼女はかう自分に辯解し乍ら、暗くなつてゐる自室の鏡の前に立つて、ぢつとその底に寫る自らの姿を見入つて、さまゞゝな嬌態を作つた。

一同は母家の食堂で夕飯をとつた。

リダは蒼白い顔色をして、俯向いたきり少しも口を利かなかつた。

食事が終ると、サニンはサルウヂンと一緒に出掛けることにした。夜は既に更けて、月は沖天にかゝつてゐた。

二人は默つたまゝ歩みを運んだ。歩み乍ら彼れは士官の顏を眺めては、都合によつたら毆りつけてやらねばならぬかも知れぬ、なぞと考へてゐた。

サルウヂンの宿舍の手前まで來た時であつた。サニンは足を停めて出拔に言つた。

『世間には破戸漢といふ奴がゐる』

士官は吃驚して訊ね返した。

『僕は考へたよ、破戸漢くらゐ人間らしい人間はないと。』

『貴方の仰有ることは？』

『默つて聞き給へ。人間所謂正直なくらゐ莫迦なことはないんだ。何人の生活に立ち入つても、すぐ罪惡と僞善に出會す。人は皆假面を冠つて澄し込んでゐるんだから癪ぢやないか。そこへ行くと破戸漢は別個のものだ。眞の破戸漢は眞面目で、世間一般に言ふところの正直とは違ふ本當の意味に於ける正直で自然な人間だ。』

『自然な人間……。』

『勿論だ。彼れはそれが欲くなると、自分の所有外の物でも手に入れる。自分に從はぬ美しい女

は、暴力に訴へても自由にする。そしてそれは驚くべき自然ではありませんか。人間は禁慾の苦しみを味ふために生れて來たんぢやないです。苦しみは決して人間の理想ぢやない。』

『御尤もです。』サルウヂンは首肯した。

『人間の理想は苦悶でなくて享樂だ。いゝですか。言葉を換へて言へば、人生の絶對の享樂境であることは、つまり天國の謂ひだ。……人生を享樂せんが爲めに、自己の慾望を制しない人、これを社會生活で言へば破戸漢ぢやないか。例へば君のやうな人間さ。』

不意をくらつたサルウヂンは跳ねしさつた。

『勿論君の如き人物さね。』

こ、サニンは平然として次に移つた。

『此世で君は最良の人間だ。そして僕も無論その仲間だがね、しかしだて、君にしろ僕にしろ、虚僞しようが、窃盜しようが、女の貞操を蹂躙しようが……殊に姦淫に對して二の足を踏むやうな男ぢやない。』

『こ、どうしてです?』

サルウヂンは戸惑つて呟いた。

『君は左樣は男はないかね。破戸漢くらゐ眞面目で、曾つ正直な人間はないこ。そこで僕は今晩一人の破戸漢に敬意をはらつて握手出來るのを光榮こするよ。』

サニンはぢつと士官の顏を凝視し、如何にも愉快らしくその手を握り緊めた。こ、突然暗い表情に蔽はれ、聲までが全で別人のやうにして

『左樣なら、お寢み。』

こ言ひざま立ち去つてしまつた。

サルウヂンはその塲に釘付にされて、去りゆく彼れの後姿を、度膽を抜かれたまゝで見送つた

サニンの言つた言葉の解釋に彼れは迷つた。そしてそれが彼れの心に不安な翳こなつて殘つたが、間もなくリダの事を思ひ出すこ、サニンはリダの兄であるから、自分に兄弟こしての愛情を示してくれたのであらう。それに違ひないこ、彼れはすつかり氣を變えて、晴れやかな氣持で自分の部屋のドアーの中へ消えて行つた。

四

モスコウ大學の工科生ユリイは、その父なる大佐の家へ歸つて來た。

彼れは、某革明的分子によつて成立する秘密結社に關係があるといふ疑ひのもとに、官憲監視の下に自家へ送還されたのであつた。彼れが捕縄されたことも、六ケ月入獄されてゐたことも、そして今度この町へ送り還される事も、家族の者達はよく知つてゐた。だから、彼れが歸宅は人々に取つて意外ではなかつた。

ユリイはその長い〳〵三晝夜を三等列車の中に搖られ通しに搖られて來たので、體はへと〳〵に疲れてゐた。家に到着すると、彼れは挨拶もそこ〳〵に濟して、直樣妹の寢室へは入り、長々とベットに横はると、前後もなく眠り込んでしまつたのである。

眼醒めた時既に夕方になつてゐた。赤々しい光線は斜めに窓硝子を射て、美しい色彩を其處に織出してゐる。

隣室からは、リヤリヤ（妹）の嬉し相な笑聲と、彼れには聞き覺えのない若い男の聲とが縺れ

〳〵に漏れ傳はつた。と、

『おや、眼が醒めたのね、』

鐵砲玉のやうに室内に跳りこんだリヤリヤがかう言つた。妹の苦勞といふものを塵程も知らぬらしい、無邪氣な快濶さは、却つて彼れの心を憂鬱に曇らせた。

『何がそんなに嬉しいんだい。』

ユリイはかう訊ねた。

『どうして兄さんは、私の喜んでゐるのを出抜にお聞きになるの？　私は退屈なんて、迚もそんな暇はありませんわ。』そして彼女は得意相につけ足すのであつた。『私はね、かう思つて感謝してゐるのよ。今の時代はそれは意義ある時代だこね。退屈するなんて罪惡も同じだわ。第一當人の恥ですわ。私、兄さんの留守の間に、仲間の人達と共同して、この町に通俗圖書館を設けたの。非常に巧く行きましたわ、圖書館の仕事だけでも手一ぱいなのよ。』

『左樣？……それはいゝこつた。』

『ですもの、どうして私が生活に退屈したりするものですか。』

リヤ〳〵の聲は溢れるやうな滿足に響いてゐた。

『ところが、僕は退屈で仕樣がない。』

と、ユリイは何氣なくつい恁う言つた。

『すると何だわね、兄さんはやつと二三時間前家に歸つて來ると、すぐ寢込んでしまつて、それでもう退屈しちやつたやうなものね。』

『僕には仕樣がない、事實その通りなんだから。』

とユリイは答へた。彼れにはそわ〳〵嬉しがつてゐる者よりか、退屈してゐる者の方が、何となく意義深く思はれたのであつた。そして彼れは妹の方へ微笑の顏を向け乍ら言つた。

『僕には一向面白くない。』

『い、わ、悲しがり屋のナイトさん。嬉しくなつても構はないから、私、兄さんに若い立派なお方を紹介するわ。』

と、リヤリヤは笑ひ乍ら彼れの手をひつ張つた。

『お待ち、その若い立派な方つて誰だね。』

『私のお婚さん。』

リヤ〳〵は兄の面を覗きこんで喜ばしげに叫んだ。左樣聞けば、彼女と父からの手紙で、近頃この町に移住して來た若い醫師が、リヤリヤの歡心を求めることに骨折つてゐるとあつたのをユリイは思ひ出した。しかし二人の間に結婚の約束までが既に成立されてゐたのだとは、未だ彼れの知らぬ處のものであつた。

『――』

彼れは意外な顏をしてリヤリヤを眺めずにはゐられなかつた。まだほんの少女だと許り思つてゐた。このあどけない、淸淨なりリヤリヤが、結婚……彼れにはそれが全く意外であると共に妹に對して肉親の溫い感情と、ある言ひ表はし難い憐愍の情を覺えた。

彼れは食堂へ行つた。そして妹の紹介で彼女の許嫁の、アナトウル、バブロヰツチ、リヤサンツエヴといふ青年と初對面の挨拶を交換した。

――これがリヤリヤの兄か？――リヤサンツエヴは相像してゐたのとは全反對な、脊の高い、痩せぎすで陰鬱らしいユリヤに會つた最初の瞬間から感じた。

――この男が妹の良人になるのか。――リヤリヤの子供々々しい樣子の中から一人前の女をみこめて戀し寄つた男はこれか――ユリヤの頭の中には、こんな考へが走つて過ぎた。そしてリヤサンツエヴを打見やる彼れの瞳は

――君は眞劍でリヤリヤを愛してゐるのかね。若し君があれを弄び物にする考へでゐるのだつたら、それは良くない事だよ。否それは罪こいふもんだ。見てやつてくれ給へ、あれはあんなに純潔で無邪氣なんだからね――

こかう訊ねてゐるかの樣であつた。リヤサンツエヴはまた、彼れの事問ひたげな表情にかう答へたいのであつた。

――私はお妹御さんを魂かけて愛してゐます。愛さないではゐられません。何て美しい方なんでせう。そしてここまで可愛らしい方なのだか……ごうです、あの首筋の綺麗さつたらありません――こ。

二人はユリヤが追放されてゐた當時の事を遠慮勝な、拙い會話のうちに問答し合つた。

夜食の時刻になつて、ノヰコヴこ、セメノブこ、イワノブの三人が彼れを訪ねて來た。

セメノブは以前大學に學んでゐたここのある肺結核の青年でついこの間この町へ家庭教師こして雇はれて來た男であつた。痩せ細つて見る影もない彼れは、年よりずつこ淋むさく見える、氣毒な位い醜い容貌を彼れは背負はされてゐた。イワノブは小學教員で、思ひきり無遠慮ながさつな男であつた。

彼れ等が來たゝめに座は自然の賑はしさを加へて行つた。酒が出た。皆は盛んにそれを呷り曾つ愉快に談笑した。リダへの愛を拒絶されたノヰコヴまでが、周圍の賑はしさに卷込まれて、暫らくは心の苦悶を打ち忘れてしまつたかのやうに見えた。

訪問者が歸る間際になつて、彼等の間には、明日、市外にある修道院に野遊を催す相談が纏つた。それには、出來るだけ多くの人を誘つて行かうこ行ふここにした。

彼れ等がそれ〴〵の方角へこ散つて行つた後で、ユリイはたゞ一人散歩に出掛けたのであつた彼れは樹木や屋並の黑い陰慘な影を見ながら、石のやうに寸時立ちつくしてゐた。が、何を思つたか、肺病患者が去つた方角へこその跡を辿つて行くのであつた。

病める大學生は、まださう遠く去つてはゐなかつた。彼れは前屈みになつて、力ない足調でこ

ほ〳〵と歩るいてゐた。そして一歩毎に輕い、肺患者特有な咳に惱まされてゐるのだつた。その黑い影坊主が、よろめく彼れの後に從つてゐた。

彼れに追ひついた時、ユリイは彼れは最前とはガラッと變つてゐる事に氣付いた。夜食の時のあのおどけ者であつたセメノブが今は、世にも悲しげな慘ましい姿で月光の下を辿つて行く。そしてその嗄れきつた咳の音は、恰かも絕望其物の如き悲しい響きを含んでゐる……

『あゝ、誰かと思つたら』

セメノブは張合のない、無愛相な聲で言つた。

『僕は少しも眠くないものですから……其邊までお送りしませう。』ユリイは辯解がましく答へた。

『それぢや一緒に行がう。』

と言つたセメノブの語調は、相變らず冷淡なものであつた。

『寒くはありませんか。』

『僕はいつでも震へてゐる。』

この答にユリイは面喰つた。嫌な感情が彼れの頭を支配した。彼れはそれを打消すべく急いで訊ねた。

『貴方は何時頃大學をお止しになつたのです。』

『ずつと以前の事さ。』

で、ユリイは大學生生活の事から、社會問題について語り出したのであるが、遂ひには熱情のまゝに彼れは議論張つた口調で盛んにお喋りを續けて止めようともしなかつた。彼れは革明思想について悲憤的な態度で說き立てた。そして、

『セメノブさん、貴方はベエベルの最近の論文をお讀になりましたか。』

『讀んだよ。』

セメノブが突慳貪に答へた。

『で、どうお感じになりました。』

『僕がか？　君、僕は君死んで行く人間なんですよ。大學生の生活がどうあらうと、ベエベルがどの樣な大議論を發表しようと、僕の知つてゐる事は唯刻々と死が自分の背後に迫つて來つゝあ

る意識だけなのだ。人間が死期の接迫を自ら識つた時は、社會問題も、トルスイの思想も、ドストイエフスキーの藝術品も、一文の値打もなくなるのだ。統ては無意義だ。』

病める大學生は憎々しく續けた。

『有機體は破壞する。』そして彼れの言葉は、突如として濕つぽい涙聲に變つた。『死がこれ程のものか、健康な君には想像も出來まい。出來ないのが當り前だ。あゝ何奴も此奴も生きてピン〳〵してゐるのに、僕丈が死ぬるのだ。これは小說でも藝術上の眞理でもない。僕はかうして軈て死んで行かねばならぬ運命なのだ。あゝ死だ。死だ……』

セメノブはひどく咳き込んだ。そして肩を波打せて苦しみ悶えた。

『僕は死ぬ。暗い地の底でごろ〳〵に腐る。いゝかね軈て白骨ばかりになる。その白骨もバラ〳〵に碎けてしもうのだ。然るに君達はまだ地上に生きて生活して行けるのだ。事によつたら、僕が永眠する地府三尺の上で、君達は愛人とごの樣な眞似をするか知れたものぢやない。ベエベルが何だ。その他澤山な偉がり家共が、一體僕にとつて何を意味するのだ。』

これらの呪はしい言葉はユリイを顫慄させるに充分であつた。彼はごぎまぎして口を挿む事

すらなし得ないのだつた。と

『では左樣なら。』

とセメノブは穩かに言つた。『僕の家は此所だよ。』

病學生と別れて家に歸つたユリイは、靜かに寢床に横はると考へた。今迄自分の信條としてたところのものが、死の前にあつては何等値なきものであつたのに彼は氣付た。何時かは自分にも死が來る。その時となつたら、生涯を賭して人生社會を幸福にしようと狂奔した自分の理想が報ひられなかつたその恨みも消滅してしもうのだ。そして唯一つの悔恨——人生が自已に與へて呉れた歡樂を味はないまゝで過した——のみが後に殘るのではなかつたか。

『人生は爭鬪の中にある。』

か……誰のために戰ふのだ。かう考へた時、彼れの心に悲しく囁くものがあつた。遣瀨ない物淋しい涙が彼れの頰を糸のやうに傳はつて流れ落ちた。

五

リヤリヤ、スブロチツチの招待狀を受取つたリダサニイナは、すぐそれを兄のサニンに見せた彼女は兄が此の野遊の同行を謝るのを望はしく思つてゐた。何故こいつて、月の光りに美化された河岸では、先夜と同じやうに必らずサルウヂンと……の一光景が演出されずにはゐないであらう。彼女としてそれは喜ばしい豫想に違ひないのだが、一行の中に兄が混つてゐて呉れたのでは、何處となく氣咎めがしてならないからであつた。

『それは面白い、僕も行かう。』

サニンは二ツ返事で賛成してしまつた。

出發の時刻になつた。サルウヂンとタナロブが中隊用の大きな馬車を駈つて彼等を迎へに來た二人はそれに同乘した。

町を離れた馬車は、廣い野原の中を僅かについてゐる轍の後を追つて全速力に走つた。風は爽やかに彼等の頰をはらひ、馬の鬣を撫でた。草は波のやうに搖れ動いた。得も言はれぬ壯快な氣

持であつた。

彼等は途の中途で、リヤリヤ達の乘つてゐる車と一つになつた。兩方の馬車から豆の彈くやうな冗談や洒落が言ひ交された。

馬は牧場を通つて林間には入つた。柏の木の香ばしい匂ひは、ぷく〳〵した落葉の地面が發散する濕氣と一つになつて、彼等の鼻腔を孕ませた。

約束の地點に到着した。

其處では既に一人の大學生と二人の若い娘とが、芝生に毛布を敷き、茶や菓子の用意をして彼等を待ち催けてゐるところであつた。

一行のうちには、初對面の連中もゐたので、始の間は互ひに警戒し合つて、場はてれ氣味であつたが、食事が始まつて、男達はウオトカを、女達は葡萄酒を飲み出してからは、一切の堅苦しさは取れて、彼等は陽氣に、何の蟠りもなく、心からの洒落を連發して笑ひ轉げ、不坐戯たはむれた。

昨晩、『僕は死ぬるんだ。地の底で僕が腐つてゆくのに君達は生きてピン〳〵跳ねたり踊つたり

するんだね。』と憎々しい呪詛を口にしたセメノブまでが、人と同じにはしやいで、滑稽な輕口を叩いてゐるのが、ユリイには合點が行かなかつた。

『すると、奴さん昨夜は一時的の悲觀に捉はれてゐたのかな？』

と彼れはかう考へても見た。と、

『皆さん小舟に乘りませう。』

リヤリヤはスカートをからげて河岸へと走り寄つた。一行の半數はそれに從つて、我早くと小舟にのり移つた。

小舟は大きなうねりを水面に起して岸を離れた。流れに沿ふて行くと、こある崖の中腹に、柏の木と雜草の繁りに半ば蔽ひ隱されやうとしてゐる一つの洞窟があつた。

『あれは何です。』

土地者でないシヤヴロフが訊ねた。

『あれか、あれは洞窟さ。』

イワノブが答へた。

『どんな洞窟なんで……』

『そんな事は解らない。何でも人の評判だと、昔、あの穴の中で贋造紙幣の工場があつたのだと言ひますがね。無論連中はお定り通り、こつ捉つて暗い處にぶち込れたんだ相で……僕はまだ子供の時分だつたから詳しい事は知らないがね、それ以來、誰もあの穴の中へは入つた人間がないらしい。』

『中は屹度面白相ね。ドルトル、セルゲイキイツチさん、貴方這入つて見て下さいな。貴方は勇氣がおありだから。』

ミリダが叫んだ。

『何の爲めにです。』

サルデインはごま突いて答へた。

『いや、僕が探險して見よう。』

ユリイは出抜にかう申出た。

舟は岸につけられた。ユリイは氣遣ふリヤリヤに何でもないのだといふ意味の薄笑ひを吳れな

から、蠟燭を用意して岸にはひ登つた。

『貴方、本氣で這入つて見やうとなさるんですか?』

大柄で美しい娘がユリイを呼び止めて叫んだ。彼女はシナといつて、一人の大學生と先發隊となつて茶菓子の用意を整へて置いたうちの一人である。

『勿論ですとも。這入つたつて差支ないでせう。』

ユリイは振返つて平然と應じた。

洞窟の入口はじめ〴〵として泥土臭い厭な空氣が漂ふてゐた。ユリイは蠟燭の灯を消さぬやうに庇ひながら、手先で探り〳〵穴の中へと進んで行つた。

洞窟の壁はすべて粘土で、おそろしく凸凹してゐて、ところ〴〵深い陷穽のやうなものが横はつてゐた。彼れは二三度も滑つて穴に落込まうとした。が、彼れは用心の上にも用心して、重苦しい空氣の、眞暗がりを除々に奥深く探つて行くのであつた。

この時、彼れは意外にも粘土を踏む人の足音を聞きつけて慄然とした。が、それは洞窟の奥からではなくて、入口から彼れの後を追つて來る足音であつたことに氣付いた彼れは、安心の吐息

と共に振返つた。それは意外にもシナであつた。

『シナイダ、バヴロヴナさん!』

ユリイは驚ろいて叫んだ。

『えゝ、私なの。』

若い娘はなれ〳〵しく囁いて、ユリイの傍近く擦り寄つた。そして『もつと奥まで行つて見ませう。』

此の暗いおそろしい洞窟の中を、若い美しい娘と二人で探險することが、ユリイに或る誘らしい愉快を與へた。彼れは蠟燭の光りでシナの足許を照らすやうにし乍らズン〴〵進んで行つた。

古い棺桶樣の板ぎれが散ばつてゐたり、粘土の四壁に黴が生えたりしてゐる。そして奥まるに從つて、空氣はいよ〳〵濃密の度を加へ、今にも窒息し相であつた。

遂に二人は最後まで來た。

『ちつとも變つた事はありませんのね。』

シナは低くかう獨言つた。そして『いくら聲を出しても外へ聞えつこは無いでせうね。』

『聞えるものですか。』

ミユリイは微かに笑つた。

ミ、彼れは急に眩惑を感じようミした。蠟燭の淡い光りに照らし出された、彼女の孕らんだ高い胸ミ、ふくよかな肩の柔らか味を目にした彼れは、瞬間、『此の女は全く自分の手中に陷つてゐる。』誰だつてその叫聲を聞く事は出來ない――ごいふ獣的な激しい考へに襲はれたので、我知らず目先がくら〳〵ミして來たのであつた。

が、彼れは突嗟の間にさもしい情熱に燃える自己を抑制して言つた。

『貴女は僕ミ一緒にこんな洞窟の中を歩るいてゐて恐ろしいミは思ひませんか。』

一瞬、シナは暗闇の中でさつミ顔を赤めて言つた。

『私、貴方の人格をお信じしてゐますわ。』

『若し僕が、貴女の思つていらつしやる樣な男でなかつたらどうなさいます。』

『その時は……私……身を投げてしまひますわ。』

シナは一層赤くなつて、しほらしくかう言つた。この短い答辯はユリイの胸に洪水のやうな愛

憐の情を呼び起した。穩らしい情慾は影を潜めて、彼れは彼女に一種尊敬の念さへ支拂つた。

間もなく出口に近づいた。彼女は彼れからあんな質問を受けたにも不拘、少しも侮蔑された心が起らないで、却つて心樂しさを感じたのはどうした譯からであらうミ、自分ミ自分に訊ね乍ら一歩々々外界の明るみへミ踏み出して行くのであつた。

六

それから三日過ぎたある夜、しかも餘程更けた時刻であつた。

リダは悄然ミして家へ歸つた。彼女は惱ましげに、如何にも疲れきつた有樣で、こつそりミ自分の部屋へは入つて行つた。

さて、室内には入るミ、彼女は急に立ち止つて兩手を組み合せ、ぢつミ床板に視線を凝固させた。顏色はおそろしく蒼ざめてゐた。彼女は自分の輕卒から、取戻のつかぬ事になつてしまつたサルウヂンミの關係を悔ひてゐるのであつた。あんな平凡な、學識も素養も自分より遙かに低劣な青年士官の慾情の囮ミして甘んじた自らを口惜がつてゐるのであつた。

彼女の誇りは最早永遠に失はれたのである。彼れが來いといへば、犬のやうにその言葉通りに從はねばならぬ彼女であつた、彼れの求めるまゝに接吻を許し、奴隷の如く、彼れの野卑な抱擁を拒む譯にはゆかなくなつたのである。

どうしてこんなになつてしまつたのか、彼女には更に了解出來なかつた。たゞ醉はされたが如き朦朧たる意識のうちに、激しい○○○○○が彼女を支配し、既に自制の力を失つた彼女は、その足許に跪いて○○○○○○○○○○○○○

リダはその場の情景を思ひ起してわな〳〵と戰慄した。そしてその兩の手で顏を蔽ひ、倒れるものゝ如く窓に寄つて戸を開いた。

月は今宵も青白い光りを庭園一ぱいに注いで、暗い木立の彼方から、夜鶯の啼く音が聞えてくる。

彼女はぢつと月の圓光を仰いで、人知れぬ傷ましさに嘆いた。偶然の——それは全く偶然の失策から、あんな輕佻な男の爲めに一生涯を滅茶々々にされてしまつた悔ひが、腹立しい形となつて彼女を攻め立てるのである。

『左樣だわ。』

彼女は捨鉢に呟いた。『二人が出會つた。そして○○○○しまつた訖だわ。妾は身を委せた?……けれ共妾はそれで愉快だつたわ。唯自分が○○○と思つて○○○○……何でもありはしない。だつて妾も嬉しかつたもの。だから○○○○○○○○○』

『樂しめるものを樂まないのはお馬鹿さんだわよ。妾が○○○○○したからつて、昨日の今日に鳥渡も變りはしないぢやないの?』

彼女は兩手を頭上にさしのばして、あらゆる下らない考へ事を拂ひ退けようとした。そして窓際を離れ、着物を脱ぎ始めた。上着の紐はさら〳〵とかすかな音を立てゝ、床板に落ちた。

『よしんば自分が結婚するまで○○○○を待つてゐたからつて、どれ丈の報酬が得られやう? 何か大變な事でもしたと思つたのは、詰り妾が馬鹿な證據だわ。詰らない!』

彼女は赤裸になつた兩の肩を撫ぜまはし乍ら、又してもかう呟いた。『左樣だとも、下らない事だつたのだわ。氣が向けば何時だつて妾は惡魔に身を○○○○○○○○○』

と、窓の外からサニンが聲をかけた。

『お前まだ起きてゐたんかい。』

彼女は吃驚して、反射的に大きなタオルで自分のあらはな肩を隠した。

『兄さんてば！　あゝ吃驚した。』

サニンは窓近く寄つた。兄の熱い呼吸を彼女はその頰に感じた。

『惜いことをした。タオルなんかで隠さない方がお前はずつと美しいのに。』

サニンは底意あるらしい小聲で言つた。『お前は美しい人だよ。』

リダは素早く兄の顔を見た。と、その表情に我知らず寒感を覺えたので、彼女は眼を庭にそらしてしまつた。心臓は高く鳴りはためいた。他の多くの若者達は、統てあんな眼付で自分を眺める。けれ共それが肉親の兄であるが故に、彼女は恐ろしさを感じたのであつた。『兄さんは、どうしてあんな眼付で自分を見るのだらう……』

サニンは、美しい妹を默々と凝視してゐたが、軈て低い不自然な聲で言つた。

『人間といふ奴は、いつも自分と幸福の間に萬里の長城を築かうとする。』

兄の言葉が何を意味してゐるのか、彼女はそれを察した。『結局はその通りだ。』彼女はさう心の

中で共鳴した自分に一種の恐ろしさを感じたので

『もう眠る時刻だわ。』

と、そゝくさに窓をしめ、ランプを消した。部屋が暗くなると同時に、月光に照らされた庭園は明るさを加へ、草原を彼方へと去る兄の姿がくつきりと描き出されて見える。

彼女は殆んど無意識にベシトの上に横はつた。一切の事が彼女の頭を惑亂させ、心を掻き拐つた。

『――どうしたのだらう？　妾は氣が狂つてしまつたのではないかしら？　左樣思ふばかりでなく、本當の色情狂になつてしまつたのではないのだらうが……』

リダは俄かに泣き出した。枕に顔をおしつけて、さめ〴〵と彼女は歔欷した。

苦しい涙を流しながら、何故自分は泣くのか、彼女には原因が解らなかつた。

サルウヂンのために、處女の尊嚴を蹂躙されたための涙である事に彼女は氣付なかつた。又彼女は先刻の兄の眼差しに、ある猥らな閃めきを見てとつた爲めにも泣いてゐるのだつた。――兄は曾つて一度もあんな眼付で自分を眺めた時はないのに……自分が墮落したのを感付いて侮辱

する心算であんな眼付を向けたのか、それとも自分が墮落したために、普通と異らない兄の表情からある物を見出したのだらうか……

しかし何よりも強く彼女を虐げたのは、彼女が女であるてう意識であつた。

『何故男だけにあの權利があるのだ。女だつて同樣な人間ではないか。既に人間である以上、自由も權利も平等でなくてはなりぬ筈のものだ。自分の生活にとつて最も強く要求するものを、自分が人生から搾取するのに何で惡い事があらう。』

彼女の心に、若々しい、力の充實した肉体の要求する歡樂は、思ふがまゝに取入れて一向差支なしとする權力の念を喚び起した。とはいへ、この考へは混然と絡り合つた網の目のやうに彼女の頭腦を搔き亂し、躰はへと〳〵に疲れ、心は鬱々と滅入つて彼女は底なしの穴に陷つてゆくものゝ如く靜かに觀念の眼を瞑つてしまつた……

七

シナ、カルサキナは小學校の女教師であつた。そして彼女は同じ學校に奉職する老孃のツボワ

と一つ家を借りて住つてゐた。

その學校では、時偶夜間を利用して、例の大學生シャロウブ等が主催者となつて朗讀會が開かれた。それは主として社會主義的學說を陳述した書物の朗讀であつた。

ユリィは當夜シャロウブに誘はれて、彼等の所謂朗讀會なるものに列席した。それは彼にとつてゝ、時間潰しであつたのと、會場へ行けばシナに會へる可能性があると思つたので、彼れはシャロウブの勸めに同意したのであつた。

恰度朗讀會が終つて、參會者がぞや〳〵と歸つて行つた後から、彼れは二人の女教師とシャロウブの四人で往來へ出た。

『これから貴方は何方へ?』

老孃のツボワガかう彼れに訊ねた。そして『妾はシャロブさんと一緒でこれからライトさんの家へ廻りますから、何なら貴方シナさんを送つてあげて下さいな。』

『喜んでお送りしませう。』

ユリイは心から答へた。そして彼れ等は右と左に別れた。

彼れはシナとつれ立ちて、朗讀會の印象を語りなぞして彼女達が住つてゐる家の方へと進んだ戸口のところまで來た時であつた。シナは

『一寸寄つていらつしやいな。』と言つた。

『え、有難う。』

ユリイは喜ばしく答へた。シナは戸を開いた。中庭の後には本庭が黑々と横はつてゐた。

『庭の方へいらつして待つてゐて下さいな。家の中へ御案内申したいのですけれど、今朝出て行つたきりなので、取り散かつてゐて却つて失禮ですから。』

かう言ひ置いて、彼女は一人で家の中へは入つた。

ユリイはゆつくりと庭の方へ歩を運んだ。が、數歩にして小徑に立止り、好奇の瞳を輝かしてぢつと暗い窓に投げつけた。

と、彼女は間もなく黑い上衣に着代へて出て來た。そして意味ありげな微笑を彼れに注いだ。

二人はニハトコ木の茂りと、高い雜草の間を掻きわけるやうにして、本庭へと歩を移した。

本庭の彼方は牧場になつてゐた。生ひ茂る雜草は莖もたはゝに花を咲せてゐた。

『此處へ坐りませう。』

と彼女は露をおく芝生の上に腰を下した。

四邊は神秘に近いほどの靜寂を湛えてゐた。ユリイは無意識にニハトコの小枝を一つ自分の方へ手繰つた。美しい露が雫となつて、彼女の髪に降りかゝつた。そして髪毛にとまつた露はキラ〳〵と輝いた。

傍目も振らずに、ぢつとシナの横顏を見戍つて止まない彼れの眸には、燃ゆる如きものが閃めいてゐた。彼女は、彼れが熱心に自分を見詰めてゐるのを知つてゐた。が、シナはしかし素知らぬ振を裝ふのであつた。そして彼女はやがて言つた。

『何故貴方は默つてばかりいらつしやるの?』

『默つてゐるのが實にいゝ氣持だつたからです。』

ユリイは吃つて低く囁いた。そして再びニハトコの小枝を引いた。

『貴方、シャロブさんお好き?』

彼女は出拔にかう訊ねると、自分乍ら唐飛な質問であつたと氣付いてホゝ、……と笑つた。

ユリィの胸に妬ましい感情が走つた。が彼れは自分を制して答へた。
『善良な方らしいですね。』
『あの方は仕事に熱心な、信念の強い方ですわ。』
ユリイはそれには答へなかつた。
夜霧は白く草原を蔽ふた。草花は露を含んできら〳〵と輝いた。
『濕つぽくなつて來ましたわね。行きませう。』
で二人は立ち上つた。内心殘り惜く思ひながら、狹い路をすれ〳〵に觸れ合ひ乍らもこへ戻つて行くのであつた。
中庭へ歸つて來た時、彼等は暗い家で、あはたゞしい人の足音を聞きつけた。
『あら、ヅボブさんが歸つて來てゐるわ。』
シナは故意と大きく叫ぶやうに言つた。そその聲を聞きつけたヅボブは
『シナさん其處なの、私、貴方を探しまはつてゐたのよ。』彼女は息を喘がせ乍ら『セメノワさんが死に相なのよ。』

『何ですつて！』
シナは我が耳を疑ふもの、如く訊ね返した。
『左樣なのよ。あの人は屹度死ぬわ。澤山こゝ咯血したの。皆なで病院に擔ぎこんだのだけど、迚も駄目だつてアナトウル、バヴロキツチさんは左樣仰有つたわ。』
『何ですつて！彼の人が……』
ユリイは我を忘れたもの、やうに訊ねた。この時、彼れの頭には、あの月夜の黑い影と、セメノワの口走つた呪ひの言葉が電光のやうに思ひ起された。
『まあお氣の毒にねえ。』
シナは愁はしく言つた。しかし彼女の心は激しい衝動を感じはしなかつた。若い水々しい肉體の所有者である彼女・幸福と悅樂に醉つてゐる現在の彼女には、死に對して眞劍な考察をめぐらす可く餘りに生氣に充ちてゐた。
『アナトウル、バヴロキツチさんのお言葉だと、明朝までは六ケ敷つて事でしたわ。』
そしてヅボブはかうつけ足した。『行つたものでせうか。』

『行つたらいゝのか、行かぬ方がいゝのか、私にも解りませんわ。』とシナ。
『行きませう。行つて見ませう。』
ユリイは肩を聳かして不確に言つた。
『では行きませう。』シナははつきりと言つた。
彼れ等は町を病院へと急いだ。
六號病室の白いベットに横臥させられたセメノワは、皆の知つてゐる彼れとは、まるで別人のやうな容貌に異つてゐた。そこには最早生きた人間の感じはなくて、硬張つた肉體は死の恐怖で充されてゐた。
枕頭には幾人かの知人が瀕死の彼れをめぐつてゐた。誰もが、息をひそめて、天井の洋燈に照らし出される彼れの顔を見詰てゐるのであつた。して、このおそろしい沈默の中に、嘯くやうなごろ〳〵と咽喉を鳴らす彼れの呼吸だけが、はつきりと聞えた。
戸が開いた。
年寄つて肥滿した牧師と、色の黑い役僧とがはいつて來た。その後から、サニンが悠然たる姿

をあらはした。牧師は醫師などに叮嚀な挨拶をすますと、
『もう意識がないのですか。』
と、誰にともなく柔らかに訊ねた。
『ありません。』
ノキコヴは口早に答へた。
牧師は何やら病人に向つて言つたが、セメノワの答へがなかつたので、十字架像を彼れの前に立て、正敎徒式な祈禱を、疳高い調子で唱え出した。役僧がそれに和して低音で祈りの歌を歌ひ出した。
鋭ごい歌調が高く天井に反響を打つた。人々ははつと氣を取直して、今にも息を引き取らんとしてゐる病人を、今更のやうに眺めたのであつた。
シナはすゝり泣きを始めた。ヅボワの頰にも涙が流れ落ちてゐた。男達の眼にも自然と涙がうかんだ。が、彼等は齒をくひしばつてそれをのみこんだ。
サニンは眉をしかめた。健康な人間が聞ひてゐてさへ、物悲しい情をそゝられる祈りの歌が、

病人の耳に達したらセメノワはどんなに堪らなからう――かう思つた彼れは腹立しくなつた。

『もつと靜かにやつて下さい。』

サニンは忌々し相に牧師に言つた。人々は彼れを振返つた。恰かもサニンが場所柄をわきまへぬ無作法を仕出かしたかのやうに。

儀式が終ると、牧師はその法衣の中へ十字架をつゝんだが、それが人々にはまた一しほと悲しものに思はれた。と、この時であつた。死人のセメノワは呼吸を盛り返して、何事をかきれ〳〵に口走らうとした。

『……こん畜生……』

彼れのきれ〳〵の言葉はかうであつた。そして彼れは兩眼を大きく睜き、ぐつと牧師を白眼つけた。

一同はこの言葉に慄然とした。牧師のてら〳〵した赭ら顏から、勿体ぶつた悲しみの表情がさつと消えた。誰もこれに氣付いた者はなかつた。が、サニンだけは鼻先でそれを冷笑した。

牧師に浴せた一語が實にセメノワの最後の言葉であつた。彼れは其ま、動かなくなり、遂に硬

直してしまつた。

『何といふ飽氣ない人間の生命だらう。』

誰の頭にもかうした感情が閃めいた。それにしても、あれ程嚴肅で、苦痛に充ちた死の事實がかくも迅速に簡單に鳧づけられたのか、彼れ等には不思議な氣持さへ起つてくるのであつた。

暫時茫然としてゐた彼等は、死者の瞼をふさいでやつたり、手を胸に組合せてやつたりし乍ら故郷も家族も知れぬ死者の噂を語り合つた。一人の妹があつて、何處かの學校で勉强してゐるらしいと、シナはかう言つたが、學校の所在地も死者の妹の名前も、勿論彼女は知りはしなかつた

彼等はやがて、ちり〳〵に別れをつけて、それ〳〵の家へと歸つて行つた。

八

騎兵大尉サルウヂンの寢臺の片隅に、リダは所在なさ相に腰を下して、兩の掌の中にハンカチを揉み潰してゐた。

彼女の著しい變化には、サルウヂン自分すら尠からず驚かざるを得ないものがあつた。あの健

康そのものの樣だつた彼女の、氣位の高い傲慢さほ、今は何處にも見るこが出來なかつた。美しい、活潤であつた一個の處女の代りとして、彼れの前には頰の落ちた、色艶のない、弱々しくも惱ましい一人の女が身を屈みて座つてゐるのである。そしてその落ち窪んだ双の瞳は、落付を失つて始終あちこちと走つてゐた。

サルウヂンが室内へ這入つて來た時、彼女の憐れつぽい眸は、眞直に彼れの面に注がれたが、又すぐ床敷の方へと首垂れてしまつた。彼れはリダが自分に恐れの心を抱いてゐるのを見て取つた。と、得体の知れぬ癇癪がこみ上げて來た。彼れは亂暴にドアーを閉めると、打つて變つた態度で傲然と彼女の前に立ち塞つた。彼れは殆んど自分を抑制し得ない腹立さに煽られてゐた。返事によつては毆りつけ兼ねぬ見幕で彼れは叱責した。

『困るぢやないか。實に怪からん！　今、僕の所へは大勢の來客があつて、その中にはお前の兄貴のサニン君も來てゐるんだ。まるでお前の遣方は、兄貴が來てるのを見こんで遣つて來たやうなものだ。』

事實彼れの客室にはサニンを始め數名の來客を見てゐるのであつた。そして雜談の最中に彼れ

の從卒は

『御婦人のお方が訪ねてお出でになりました。』

と取次いだのでもある。そしてまたサルウヂンとリダとの關係は、既に町の人達に傳はつてゐたのだつた。だから婦人の來訪者が誰であるかぐらゐは、彼等は容易に推察せずにはゐないであらう……暗い陰影を潜めたリダの瞳は、異常な輝きを放つて彼れを見上げた。その鋭ごい眼光は、サルウヂンをして、『これは少し言ひ過ぎたな』と思はせた。彼れは白い齒をあらはし、急に優しくなつて彼女の手を取り、その傍近く身を寄せて言つた。

『だが、まあいゝさ。僕は唯お前のために心配したんだよ。お前に會へば勿論僕は嬉しいさ。僕だつてお前に會ひたかつたんだからね。』

彼れは彼女のいゝ香りのする手をとりあげると、用心しい〳〵手袋の上からその手に自分の唇を持つて行つた。

『本當――』

リダは彼れには解せぬ表情の眼をあげて訊ねた。が、その表情は、

『貴方は眞實妾を愛してゐて下さるの。妾がどんな女になつてしまつたか、貴方は知つていらつしやる筈ですわね。もう妾の體は以前のリダではありません。妾は貴方が怖い。妾は貴方の他に縋る人もない憐れな、墮落した女になつてしまつたのです。』

とかう訴へてゐたのである。

『お前は僕を疑つてゐるんだね。』

サルウヂンはあいまいに答へた。そして再び彼女の手をとりあけて接吻した。

思想と感情が今彼れの腦裡に錯然と混交して湧き起つた。二日前、リダは黒髪をこの白い枕の上になげ出し、熱情に燃える美しい肉體を○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、そして彼自身形容し難い○○○の熱火に身も心も投げ出してしまつたのであつた。

その時、彼等の心の中に唯○○○○○○○○○○、○○○○○○○○、○○○○○○○○、○○○○○○、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○、○○○○○○○○、○○○○○○○○あらゆる恥羞、あらゆる外聞を忘れて、一圖○○○○○○○たかつたのである。

ところが、それと同じ人間のリダに、今の彼れの感情は堪らない嫌氣を覺えた。さつさと出て行つて貰ひたかつた。二度と再びこの女の顏を見たり、聲を聞いたりするのが嫌らしくて、單に彼女の傍に腰かけてゐる事實すら、彼れには苦痛の種となつて來た。

が、彼女に對する氣衆から、彼れは其まゝぢつとしてゐなければならなかつた。最早二人を結合させる何ものもない――と彼れはかう考へてゐた。彼れが彼女によつて充されたところの快樂は、同時に彼女も彼れによつて與へられたところの快樂であつて見れば、そのために、何も自分は彼女の束縛を受ける理由がない。と彼れはかう解釋した。

リダが今にある要求をもち出すであらうことを彼れは豫期した。その要求に自分は應ずべきか斷然拒絕すべきであるか？　サルウヂンはこの豫想のために可加減うんざりした。この豫想は彼れの心を憤らせ曾つ傷つけた。お前は俺に要求する權利はないんだぞ！　彼れはかう呶鳴りたかつた。

『あゝ……女つて代物は、シエクスピアーの言つた通りだ……』

リダはビクッとして彼れを見やつた。と、彼女の心は銳利なメスの如きもので突き通された氣

がした。今こそ彼女はハッキリ知つた。自分はこの男に捨てられた……

自分の持つあらゆる歡樂、美、誇り、彼女はそれらの尊いものを――生涯に二度と取戻すこと

の出來ぬ處女の貞操、純潔――この卑劣な、俗惡な野獸に踏みにぢられてしまつたのだ。そして

この野獸は、自分が與へてやつた感覺の享樂に感謝と喜悅の意を表しやうとしないばかりか、却

つてさもしい情慾の飽滿をなめつくして自分を辱め汚したのである。彼女はそれを思つて、絶望

的に大地に倒れて泣き叫ばうとした。

が、次の瞬間、絶望的悲嘆は、それに相對する憎惡となり復讐の念に變つて行つた。リダは憎

々しく言つた。

『貴方は今やつとお解りになりましたのね。御自分がどんなに馬鹿だつて事を。』

この亂暴な言葉は、上品なリダの口から發せられたものであつたゞけに、サルウヂンは思はず

身じろぎした程驚ろかされた。

『何て口の利き方だ。』

彼れは憤然として身をふるはせた。

『妾は口の利き方なんぞ氣にしてゐられる悠長な時ではありません。』

『その悲劇はごうした譯だい。』

サルウヂンは顏を歪めて言ひ返した。そして如何にも格巧よく出來てゐる彼女の手やまるく

しい肩の曲線を眺めてゐるうちに、彼れは再び襲ひかゝる○○○○○○○○を感じ出した。

今まで自分より上手の人間として、内々氣を兼ねてゐた彼女が、今はかうしてしよんぼりと自

分の前に座つてゐる――彼女より優勢な地位を占めてゐる意識は、サルウヂンを滿足させ曾つ勇

氣付けた。彼れは物柔らかにリダの手を取つて、自分の方へ引き寄せた。情熱に昂つた彼れの呼

吸は、既に亂調子に急らしくなつてゐた。

『ね、可いぢやないの。僕は怒つてやしないんだよ。』

『さう考へてるの?』

リダはかう突き返した。そして彼れを嘲ることによつて自己の力を恢復し得たので、きつと彼

れの顏を正視した。

『左樣だとも。』

サルウヂンは猥らな情熱から彼女を抱擁した。自分の抱擁が如何なる効果を彼女に及ぼすかを意識しながら……が、彼女は氷のやうな冷やかさを崩さなかつたので、あての外れた彼れの両手は自然に弛んで來た。

『さう怒らなくても、もう可いぢやないか。僕の可愛い小猫さん。』

サルウヂンは甘つたるく言ひ寄つた。

『小猫ですつて、フン！』

リダは意地悪けに彼れを突きのけた。サルウヂンは情慾の逡〇が水泡に歸したので、侮辱された腹立しさを覺えた。

『どうしたんだい！』

怒りのために彼れの顏面には赤い斑點がしみ出してゐた。と、リダは不意に兩手で面を蔽ふて泣き出した。彼女はまるで百姓女のやうに、身を屈め、ひき延したすゝり泣きに泣き崩れるのであつた。サルウヂンは當惑して、彼女の兩手をその顏から引き離さうとした。が、リダは頑固に抵抗していつまでも〳〵泣き續けた。

『もうお止しつたら！』

サルウヂンは噛み出すやうに言つて、彼方此方と部屋の中を歩きまはつた。が、どうしても自制することの出來ぬ〇〇〇〇〇〇〇〇に、彼れは又してもリダに接近して、〇〇〇〇〇〇。けれ共彼女は邪慳に身を振切つて彼れから脱れやうとした。偶然ではあつたが、彼女の肘は強にサルウヂンの顎を打つた。歯と歯が堅い音を立てゝ鳴つた。

『何をするんだ。畜生！』

彼れは具體的に腹を立てゝ吸鳴つた。

『何て口の利き方でせう。』

リダは彼れの言葉を眞似て仕返しを試みた。

『誰だつて怒らずにゐるものか。お前がどんな氣でこんな事をしたか、それを知つてゐる以上は……。』

『貴方には解つこありませんよ。』

リダは慘酷に言つた。

沈默が來た。

リダは眞正面からぢつと彼れを見据へてゐた。そして、

『貴方は何故默つてゐるの、何とか仰有いよ。』

『儀が、……』

『貴方にでなくて誰でせう。お氣毒乍ら、妾は貴方に言つたのよ。人をこんな體にしてしまつて……あゝ情けない。』

絶望の涙を一ぱいにためて、リダは狂ほしく悶えた。サルウヂンの頭を隼のやうに（この女に手切金をやつて、一刻も早く身を退ける事だ。）この考へが走りすぎた。が、流石に彼れはそれと口に出し兼ねた。さうした男の心をリダはすぐ讀んでとつた。

『犬！　獸物！』

彼女にとつて、またサルウヂンにも思ひがけない言葉が突發的に彼女の[illegible]を突いて出た。と同時に彼女は入口へと走り出した。袖口が、戸の引金にかゝつて、鈎形に裂け千裂れた。

サルウヂンは、彼女の最後の言葉に憤然とした。やくざ者とか、破廉恥漢と罵られたのならば、

彼れもそれ程まで憤らなかつたであらうが、『犬！』と罵られたに至つては、彼れは呆然としてその後姿を見送るより他を知らないのだつた。

やがて、彼れはニヤツと冷笑した。胸の底の何處からとなく、寛いだ氣持が流れ出して來るのを彼れは覺えた。

『彼奴との關係もこれでお仕舞だ。』

とはいへ、リダのやうに美しい、趣味の高い女を、再び掌中の珠とすることは出來ないであらう。かう思ふと彼れは心もち淋しかつた。が彼れは兩手で空を切つて獨言つた。

『何んだ。彼奴ばかりが女ぢやあるまいし、美しい奴は幾らでも居らうね。』

サニンは中途から酒席をはずし、そつと窓際によつて二人の經緯を立ち聞きしてゐた。彼れは一際の事情を推察した。しかし別に驚ろきはしなかつた。リダが、

『犬！　けもの！』

と浴せかけた時、彼れは滿足した笑聲を立てた。そして彼れは彈力的に壁を離れると、誰かに

見つかりはしまいかといふ氣遣ひもなく、怒然と庭を横ぎつて、彼方の川の方へと去つたのであつた。

蜥蜴が一尾、彼れの前を横ぎつた。彼れは草叢をかき分けてゆく、そのつる〳〵した小さい躰を、いつ迄も眼で追ひまはしてゐた。

九

リダはサルウヂンの家を飛出しはしたもの、、家へは歸らないで、道を正反對の方へ取つた。眞晝であつた。熱い太陽の光線に陽炎は太く燃え上り、空氣は息詰るやうに重苦しかつた彼女には、暑いのか、寒いのか、又明るいのか暗いのか何事も氣がつかなかつた。唯彼女は習慣的に傘をさしてゐるに過ぎなかつたのだ。

彼女は埃をかぶつた雜草が生え繁つてゐる塀に沿ふて的もなく無暗に急いだ。

『妾は何處へ行かうとしてゐるのだらう。……』

彼女は最早サルウヂンに對して憎しみの情を抱いてはゐなかつた。どんな氣持からであつたか

自分さへ解らないまゝで彼女はサルウヂンの許を訪ねたのであつた。彼女には、どうも彼れなしには生きて行けぬ、又自分一人では此の苦悶を背負きれぬ氣がして、それで前後の思慮なく彼れを訪問したのであつたが、一切は過去に屬してしまつた。あるものは唯、孤獨の詫しい意識であつた。

彼女はます〳〵急ぎ足に、殆んど駈け出さない許りにして歩るいた。が、心は更に先き走つて彼女は自分の足の鈍さにいら立ち切つた。

橋の上に來た時であつた。彼女の歩調はピタと釘付られてしまつた。と同時に彼女は何のために、何を爲やうとして自分はあんなに先を急いでゐたかを思ひ起した。恐怖が寒感となつて總身を震はせた。

涙は眼一ぱいに溢れた。こんなに美しい、こんなに愛すべき自分の生命が我自らによつて滅却されやうとしてゐる……彼女は激しい眩惑に苦しめられ、我知らず欄干に身を支へた。と、手袋が一つ、彼女の手から水上へと舞ひ落ちて行つた。

不吉な前兆でゞもあるかのやうに彼女は怖れ驚ろいてその行先を眺めた。

手袋は黒味かゝつた青い流れの上を、ゆるやかな螺廻を見せながら、物凄い深味へと沈んで行つたかと思ふと、恰かも斷末魔の苦痛を示すものゝ如く、今一度ぷくつと浮き上つた。リダはそれを見失ふまいとして深淵の底へ瞳を覗きこませた。

『どうなさいましたの、お嬢さま。』

耳近く女の聲がした。リダは愕然として振返つた。と、彼女の前には肥滿した百姓女が思ひやり深い面持で彼女を眺めてゐるのだつた。

百姓女は、彼女が手袋を落したことに同情を寄せてゐたのであるが、リダには、心の中の秘密を憐れみ氣の毒がられてゐるものゝやうに思はれた。

『何でもありませんの、小母さん。』

彼女はそゝくさとかう答へると、又しても急ぎ足で橋の上を立ちのいて行つた。

『此處では駄目だわ。人通りがある……』

で、彼女は川岸を左の方へと曲つて行つた。小徑には刺を持つた雜草がのさばり出てゐて、屢々彼女の歩行を妨げやうとした。

リダの内部は、生を欲する要求で一ぱいになつてゐた。『どんな事があつても……妾は生きたい。生きて行かねばならぬ……』

リダは心の中で無性に繰返した。しかし彼女の足は一歩毎にゆく手を塞ぐ何物かを引き千裂り踏みつけて行かねばならぬやうに、彼女をして、行く可き道の終極であると自分で定めてゐるらしい場所へと進ませるのであつた。

やがて彼女はその地點に到達した。そして突出した岸を走り去る急流の青い、暗黑な水を瞰下した時、自分の本能の如何に強く生存を主張してゐるかを彼女は知つた。しかしどうにもこの上生きてゆく事は出來ない。自分はどうあつても死なねばならぬ……

彼女は一方の手袋と日傘をその場に投げ捨てると、蔚の中を岸の方へと別け入つた。

無量の感慨が――幼い頃のなつかしい思ひ出や、その他さまざまな時と事件の追懷が渦巻となつて彼女の腦裡をくるめいた。母親の顔がふいつと浮み上つて來た。この時くらゐ彼女は、自分を、このリダを母親がどんなに愛してくれてゐるかを、泌々と思つた時はなかつた。

と、一切は熱にうなされる時の幻覺のやうに紛亂した。生きたい本能、死の恐怖、信仰が繋ぐ

希望、一切が終滅するといふ意識、さては今自分は茲で自滅しようとしてゐるのだといふ場所の自覺、と思ふと、不意に男の姿があらはれた。それは何故だか兄のサニンによく似てゐるやうな氣が彼女はした。

『こら、お前は何處まで馬鹿な眞似をしようとするんだ。』

かう叫んだ者は彼女の幻覺ではなく、正しくサニンであつた。

理論を超越した人間の思想と本能との連環は、彼女をして何時の間にかサルウヂンの庭園の行詰りへ彼女を呼び戻してゐたのであつた。しかも彼女が死を決した場所は、彼女はそこで窮屈な姿正を辛へ乍ら、半ば破損した垣根により沿ひ、明るい月光を木々の陰影に隱藏され乍ら始めてサルウヂンの自由に身を委せた其處なのであつた。

サニンは遠方から彼女を發見した。そして彼女が何を爲さんとしつゝあるかをすぐ察した。彼れは倭樹や庭の蒴をとび越し、驀然にリダの處へ駈けつけたのであつた。そして今一歩といふ水際の處でリダを喰ひ止めることが出來た。

彼れは妹を垣根の際まで連れ戻してそこに座らせた。リダは正體もなく

『神樣々々、あゝ……』

と子供のやうにすゝり上げた。

『まるで赤ん坊だよ、お前は。』

サニンは親愛をこめた優しい聲で慰めた。リダは犇と兄の太い逞しい腕に縋りついた。そして一層聲高く泣き續けた。

『僕は何も彼も知つてゐる。お前が何をそんなに悲しんでゐるかをね。僕はずつと前からお前達の經緯を殘らず知つてゐたんだよ。』

リダは、サルウヂンとの關係は既に一般的に知れわたつてゐることは承知してゐたものゝ、兄から、しかも面と向つてかう言はれると、恰かも彼れに挫がれたやうな氣がした。彼女は驚ろきの眼を大きく見開らいて兄から身をのけ退つた。

『何をそんなに驚ろくんだい。自分の行爲を、お前はそんなに惡いと思つてゐるのかい。サルウヂンがお前と結婚しないから惡い？　それこそ結構なことつた。お前にだつて解つてゐるだらう。奴は美男子で戀をするには誂へ向きの男だが、卑屈で下等な人間だつて事は、身を委せぬ前から

お前は知つてゐたぢやないか。左樣さ、奴は唯い、男振の奴といふ丈さ。さうしてお前は既に充分奴の美しいこころを弄び樂んだぢやないか。それでい、んだよ。』

『い、え違ひます。神樣。弄んだのはあの人で決して妾ではありません。』

『成程、お前は今懷姙してゐるからね。』

リダは首を縮めて、深く俯向いてしまつた。

『それは無論可い事ではない。』

サニンは平靜に言葉を續けた。『だが、お前は餘まり氣が弱いよ。死んだこころで始らないぢやないか。まあ御覽、太陽は輝いてゐる。何て世界は潑溂として美しいんだらう。お前がこの美しい世界から自滅した後で、世の中の奴等がお前の懷姙してゐた事を聞いたこころで、それがお前こ何を關係するね。お前は懷姙した爲めに死なうこするのでなくて、社會的の否難を怖がつてゐるからなんだ。お前自身が不幸であるからではなくて、お前こ自分この間に不幸があるやうに思ふから不可いんだ。』

リダは物問ひたげに大きな瞳を睜いて兄を仰いだ。サニンはその閃めく表情に彼女が自分の言

葉の意義を理解しようこしてゐるのを讀んだ。

『だ[illegible]て……妾はどうしたらい、です。ねえ、他にい、方法がありませんもの。』

彼女は憂はしく言つた。

『方法は二つある。第一は腹の中の子供を○○○○する事だ。その子供の誕生を望んでゐる者は一人もないだらう。また、その子供が生れることは同時に永遠の苦痛を拵へたのに對しいから○○○○○○。』

リダの眼には鉛か、つた恐怖の色を浮動した。

『生れ出る者を殺すのは確かに惡い。けれどもまだ何も解らぬ一個の胎芽——卽ち血こ肉の小さい球塊を滅○○○○○○○○○○○○○』

リダは唯ならぬ恐怖にもないた。彼女は兄の顏を見上げる事すら恐ろしくて出來なかつた。

『妾には出來ないわ。出來ないわ。』

彼女は嗄れた聲でかう言つた。

『お前に、それが決行出來なければ……第二の方法を取るまでさ。僕は彼奴をこの町にゐる事

の出來ぬやうにしてやる。彼奴さへ追つぱらへば、兎に角お前の躰の事は秘密が保てるからね。そしてお前はノキコブと結婚するんだ。』

ノキコブの名を聞くと同時に、彼女はある懷しさを覺えた。が、それはほんの瞬間でしかなかつた。彼女の希望は忽ち、自分は穢れはてた、彼れに愛して貰ふ價値のない女になり下つてゐる事を思ひ出した。

『そんな事は出來ません。幾ら何だつて餘り恥知らず……』

『そんな馬鹿な考へは考へぬ方がいゝよ。』サニンは不快相に言つた。『恥しいと。恥ずべき行爲だと……お前は僕の言葉に驚ろかされたらしいが、さうすると事が罪惡かい。こいつて其まゝでゐては母の生命に關する大事件ぢやなかつたのか。その生涯やその幸福に關するよりは、僕の言ふ事の方が少くとも罪惡でも恥ずべき行爲でもない筈ぢやないか。あゝ人間つて奴は、どうしてかうまで自分で拵へた影を怖がるんだらう……』

サニンは暫らく口を噤んでゐた。が、

『お前は恥ずべき行爲だつて言ふ。或は左樣かも知れない。だがノキコブは魂からお前を愛してゐる。この際何も彼もぶち明けてしもうんだ。すると彼奴は自分が自殺したいくらい若掻き嘆くだらうが、結局お前を許して呉れるさ。そこでお前も彼奴を愛しる事が出來たら、萬事は圓く治つて行かずにはゐないんだ。お前はノキコブを愛しるがいゝ。若し彼奴を愛しる事が出來なかつたら、僕と一緒に暮さうぢやないか。人間は何處へ行つたつて生きられるやうに出來てゐるんだからね。』

――その通りだわ。どんな事があつても自分は生きたがつてゐるのだわ。生きなければ……生きなければ――リダはかう考へた。彼女は我知らず莞爾とした。その微笑は極り惡くはあつたが自分乍らまだ笑へるといふ自覺に彼女は喜ばしさを感じた。

『そこだよ！』

サニンは嬉し相にピョンと跳ね上つて言つた。『然うさ。生きなけや嘘だ。こころで僕はお前の苦痛を救つてあげたのだ。その代りお前の美しい手をお貸し。』

リダはニツコリとして默つて居た。リダの心に變化を與へたのは、强ちサニンの言葉ばかりからだとは言へなかつた。何故といつて、彼女の心には生を欲する熾烈な欲求が、彼女が青黑い深

淵の底へ身を跳らせやうとした最後の瞬間にも強く働らいてゐたから。

『生きるわ。』

彼女はこみ上げてくる大歡喜から夢中で叫んだ。

『それでいゝんだ。さ、そこで僕に接吻させておくれ。お前はそんなに美しいんだからね。』

リダは無言に合點いた。サニンは彼女の溫い、彈力に富んだ肉體を、自分の强い逞しい腕のうちに引き寄せた。

一種異樣な、名狀し難い快ろよさがリダの全身に泌みわたつた。彼女が持つてゐる一切のものはもつと强烈な、もつと豐饒な生命の憧れへと燃え焦れた　○○

○○（三行塗抹）——妾はまあ何うしたこいふんだらう——彼女は愕然とした愉悅の中に考へた。

——さう〳〵、投身しやうとしたのだつけ。馬鹿だつたねえ。何故あんな考へになつたのだらう。まあ、何て美い事なんだらう。○○誰だつて同じだわ。構はないことよ。一圖に生きて行かう。生きさへすればそれでよかつたんだわ。——

『左樣さ。い・事は何時だつて可いんだからね。他に何も考へる必要はありはしない』

サニンは彼女の躰を離しながら言つた。リダは恍惚とした幸福な微笑を湛へ乍ら、靜かに髮の形をなほした。

サニンは彼女に日傘と手袋を拾つて渡した。そして兄と並んで川岸の上を歩き乍ら、何といふことなしに微笑のこみ上げて來る彼女の、圓昧をもつた高い胸の上を日光は正面から照りつけてゐた。

＋

ノヰコヴは自分で戸を開けに行つて、サニンを内に入れた。が、サニンを見ると同時に彼れは不快な顏付を隱さうともしなかつた。統てリダに對する、乃至は何とも解らぬ美しさに對する追

想は、一方ならず彼れの胸を痛めさせた。

サニンは、さうしたノキコヴの心持を推察した。で、彼れは親はしさを唇に湛はせながらはゝつて行つた。ノキコヴの部屋は、床こいはず、戸棚こいはず、恐ろしく取亂れてゐた。旅行靴が口を開いて何ものをか待つてゐるらしい樣子に見えた。

『何處へ行くんだね。』

サニンはやゝ意外らしく訊ねた。

ノキコヴは彼れを振向かうこもしないで、口を噤んで四邊の物をかきました。が、

『僕はこの町を去るんだ。そして遠いゝ不偶な土地へ出發するのだ。』

サニンは、彼れこ旅行具を等分に見較べ、さて聲高に笑つた。ノキコヴは默つて一束のガラス管こ長靴の荷作りにかゝつた。彼れは堪え難い寂寥こ悲哀に包まれてゐるのだつた。

『そんな縛り方ぢや、すぐ抜けてしもうだらう。』

『……』ノキコヴは短い一眄をサニンに呉れた。『默つてゐて貰へないものだらうか。僕がごんなに悲しいのか、君には解らないかね。』

『僕の意見では――』サニンは間を置いて言つた。『そんな不景氣な土地へ旅をするよりか、リダこ結婚した方が餘つ程しやれてゐるよ。』

ノキコヴはヒョイツこ彼れを振返つた。

『そんな下らない冗談は止してくれ給へ。』

ノキコヴは聲ごこ躰まで震はしてゐた。

『冗談――それこも君はリダこ結婚するのが不幸だこ思ふのかい。』

『止し給へてば！』

ノキコヴは今にも泣き出したい顏付になり、ひよろ〳〵した足つきでサニンに突き當つた。そして泥に汚れた靴を攫みこるこ、サニンの頭上に振りあげた。

『靜かにしろ、何の事だ！』

サニンは身を退け乍ら言つた。『君はこの泥靴で僕をごうする心算なんだ。』

ノキコヴは靴を床に投げ出し、喘ぎ〳〵言つた。

『君が惡いからさ。』

そして彼れの頰には大粒の涙が霰のやうに散つた。『どんなに僕が切ないか。それを君が知つてくれたらねえ……あゝ……』

『知つてゐるよ。』

サニンは優しく彼れをいたはつた

『いや、僕の氣持が君に解るもんか。』

『處が僕は察してゐるよ。ね、男らしくすつぱりと打ち明けて語らうぢやないか。』と、サニンは彼れの膝の上に自分の手をのせて、

『君はたゞリダが拒絶したので出發を思ひ立つたのだらう。』

ノキコヴは俯向いてしまつた。恰かも生々しい傷口を掻きまはされるかの如く彼れはあつた。サニンはその樣子を眺めて考へた。

『此の男は何て可愛らしい好人物だらう。』

で彼れは言つた。

『リダとサルウヂンとの間に、どんな關係が生じたか、それは確なところは僕も知らない。しか

しリダの性格から考へて見ると、彼れ等の間に大した事の起つて來やう筈がないよ。君は誰よりもよくリダを觀察してゐる筈だ。』

ノキコヴの眼前には、優しい無垢なリダの美しさがちらついた。彼れは靜かに瞼を合せた。そしてサニンの言ふところを其まゝに信じた。

『よし二人の間に一寸した關係があつたとしても、それはもう過ぎ去つてしまつたのだ。要するに、自由と幸福に憧れてゐる若い娘に、少しくらゐ間違があつたからつて、それが君にどれだけ關係するのだ。』

ノキコヴは信賴に溢れる眸をサニンに向けた。と、希望の曙光が、極めて微弱ながら彼れの胸に惠まれた。と、甘い〳〵感激が涙となつて彼れの瞳を轉げ落ちた。

『あゝ左樣であつたのか、僕は、僕はあんな風に考へてゐた……』

『詰らない邪推に苦しめられたもんだね。リダの事は君がよく知つてゐる筈だ。あんなのが戀愛だといひ得るかね。』

感謝にともる眸で、ノキコヴはぢつとサニンを凝視して止まなかつた。

サニンは出拔の憤りの情に煽られた。自分が戀してゐる女に、誰もまだ手をつけてゐないと知ると、容易く幸福と安堵の心を味はひ得る男の顏を、彼れは見つめた。

『そこでだ。』

サニンは立上りざま言ひ放つた。『これだけの事は君も知つて置き給へ。リダは彼女を愛してゐたばかりぢやない。奴とあれとはちやんと關係してお土產まで腹の中に溜つてゐるつて事だけはね。』

室の內は森と鳴を靜めてしまつた。

『何故、君は何とも言はないんだい。』

サニンは冷たい皮肉を眼尻にうかべて彼れを見下した『リダはそれがために飛でもない悲劇の主人公にならうとするこころだつたのだ。あの時僕が居合さなかつたら、今頃あれは川底の泥の中で海老にでも食はれてゐるだらう。死ぬのもいゝさ。人間はごうせ一度は死ぬるのだからね、といつて死なぬでもいゝこころを、周圍の奴等のために人生の快樂と幸福を、自滅させてしもうのは罪だ。僕は、若い美しい娘を見殺しにする奴があつたら、其奴を毆りつけて頭の皿を叩き破

つてやりたい程腹が立つ。こころで問題は君に移るが、君がリダと結婚しようと地獄の女と結婚しようと、それは君の自由だが、健在な思想が君にある以上は、若い女が自分の思慮の足りなかつたばかりで、單にそれだけの理由で、君自身も若いその女も生涯不幸にしてしもうのは、所謂罪惡だ、君は何の權利があつてリダに背くのだ。少くとも健全な思想と聰明な頭をもつてゐる君である以上はだ……君はリダが……のために醜くなつたといふのか。君に歡樂を與へることの出來ぬ女になつたとでも思ふのか。君の遣口はまるであれに今一つの罪を背負せようとするのも同じだよ。え、左樣ぢやなかつたのかい。』

『僕がそんな考へでないつて事は、君も知つてゐるぢやないか。』

ノキコヴは吃り〳〵言つた。

『然うでなければ、どうだ?』

ノキコヴは沈默した。彼れの心は暗かつた。寂しい空虛であつた。と、その暗闇の彼方から一條の微光が投げつけられたやうに、彼れの胸中は男らしい犧牲の快さが次第に浸つて行つた。

『僕は知つてゐるよ。』

サニンは物やはらかに言つた。『君の氣持がいまごんな方へ傾きかけて來たか、僕にはよく解るよ。ね、リダの所へ行き給へ。リダがごの程度までの愛情を君に捧げるか、或は全々君を愛してゐないか、それは僕も知らない。たゞ僕は信じるよ。君があれの所へ行つて、あれのために第二番目の人間として一時的な快樂をもつてあれを傷ける心算でなかつたら、〇〇〇〇〇〇、その後のことは、誰にだつて解りはしないのだ。』

悲しみと喜びがノキコヴの胸を交叉した。と、

『リダのところへ行き給へ。』

サニンは重ねて言つた。『あれは喜んで君を迎へるに極つてゐるさ。畜生根性の奴等ばかりの中へ、眞人間の姿をした君があらはれるんだもの、あれは喜ばない譯がないさ。さ、行かうよ。』

『行く――』

ノキコヴはにつこりした。が、彼れは扉のところでヒタと立止つた。そしてサニンの面に見入りて力强い響きの聲で言つた。

『それでね、出來る事だつたら、君、僕はリダさんを幸福にしてあげるよ。』

『それでいゝんだよ。』

サニンは平然と、しかし親はしげにかう答へた。

十一

夏は燒け爛れるやうな暑氣をもつて、この町を威嚇してゐた。月は、夜毎に圓るい鮮やかな姿を沖天高くかゝげた。重々しい空氣は庭の草いきれとごろけ合つて、躰のとろけてしまひ相な倦さで人々を苦しがらせた。

暑い日中にも人々は生活のために脂汗をしぼつて働らかなければならなかつた。が、地平線の彼方に、神秘めいた月の圓輪が見え出して來ると、人も地も清々しい生氣を呼び戻すことが出來た。草花は露をのせ、ナイチンゲールの庭といふ統ての庭に美しい啼聲を震はせた。微風はそよ〳〵と流れ、人々の眼はやはらかい潤みを帶びた。そして澄みわたり、冴えきつた月光の下に、影といふ影は漆黑なる艶味を見せ、女の裳は輕ろやかに、濕氣をふくんだ草原を撫ぜた。樂しい愛のさゝやきが、彼方にも此方にも取り交された。

ユリイ、スワロジッチはシヤフロヴと共に、例の朗讀會の事で奔走してゐた。彼れは忙しかつた。なすべき仕事の多くを彼れは持つてゐた。それだといふのに、彼れには一切の事が興味索漠としてゐて、倦怠を感じるばかりであつた。たゞ彼れの生活に潑剌たの火花が發しる瞬間といつては、自分の健康の力强さを意識する時か、戀人をほしく思ふ時くらゐなものであつた。シナは非常に彼れには美しかつた。背が高くて、如何にも强健で、眞白な頸や愛嬌のいゝ上品な顏立をしてゐた。彼女は澤山の書物を讀んで、偉大な思想に接してゐた。また彼女自身詩をよく作つた

ユリイは彼女の存在に惱まされた。そして彼れは彼女によつて、曾つて覺えなかつた力を身内に覺えた。夜が來ると、彼れはぢつとしてゐるに堪えきれなくなつて、彼女を探しに家を外にした。とはいへ、彼女を慕ひ寄る彼れの濃やかな情緒の本質は、それはたゞ性慾であつた。その他何ものでもありはしなかつた。そしてその本能慾への意識に、彼れは何故だか激しい侮辱を覺えた。

それにも頓着なく、若い異性と異性が互ひに牽引し合ふ不可思議な作用は、强い絆となつて二人を結びつけてしまつてゐた。この靈感的な働らきは、恰かも鏡の面に寫し出されるやうに、こ

んな些細な動作でも、彼れは彼女の、彼女は彼れの心の中を讀むことが出來た。

彼女はユリイを自分一人の、自分だけのユリイにしたかつた。して、絕えざる細心な注意をもつて微細に彼れの一擧一動を觀察した。

だといふのに、彼女は、あの肩幅の廣い、物に動じない深い眸を持つたサニンが自分に近寄つて來る時、得體の知れぬ官能の戰慄を覺えた。彼女はこの不可知な現象に我ながら驚ろいた。そして彼れといふ男に心を動かされる原因を究めようがために、彼女はサニンを觀察することを思ひ止まらなかつた。

リダがあの怒ろしい悲劇の一幕に苦められた同じ日の夜であつた。ユリイとシナは圖書館で出會つた。そして歸る時二人は勿論一つであつた。

彼れは彼女を送り屆けるべく、二人は月の光りに照らされてゐる淋しい道々を並んで歩るいた

四邊は靜まりかへつてゐた。

二人は、彼女の住家のすぐ近くの、深い木立につゝまれたベンチに腰かけた。眼の前には、月光に照らされた大通が彼方へ走つて、突きあたつたところに寺院の圓塔が踞つて見えた。その背

後には木立が黑々と盛れ上つて、圓塔上の金の十字架の周圍を星はきら〳〵と輝やいてゐた。

『御覽なさい。何て美しい夜景でせう。』

シナは朗らかな聲と共に彼方を指ざして言つた。

彼れは、彼女の小ロシヤ式の廣やかな新月形な襟の中につゝまれてゐる肩を、そつと眺めやつた。彼れは彼女を自分の腕〇〇〇〇〇〇半ば開いたその〇〇〇〇〇〇血腥い本能慾に駛られた。矢庭に——今すぐそれを遂行したい野望が彼れを無性に鞭打つた。が、彼れの臆病はその瞬間の機會を空しく逸し去つてしまつた。彼れは自らを嘲つた。聲は嗄れた奇妙なものとなつて音立てた。

『えゝ、何とか仰有つて?』

シナはかう訊ねた。

『いゝえ……何でもありません。』

ユリイは自分の慄えを抑へつけながら出鱈目を言つた。『あんまりいゝ景色だものですから…』

しばらく二人の口は閉ざされた。と

『貴方はこれ迄に戀をなすつた事があつて?』

シナは出拔にかう問ふた。

『えゝあります。』

『——誰樣と?』

『誰つて……貴女をです。』

ユリイは冗談らしく努めて言つた。がその調子は少しも成功してゐなかつた。彼女は愕ろきの視線を素早く彼れに向けた。暗がりの中にその眸は幸福の輝きを放つてゐた。

ユリイは彼女を抱擁してやりたい衝動を感じた。が、彼れは次の刹那すぐその慾望を抑制したそしてまた第二の機會は失はれた。

『私を嬲つてゐるんだわ——』

彼女は何かなし彼から侮辱されたと思つた。さう感じた瞬間と共に、今まで持ち續けられてゐた溫い情緒は、忽ちにして氷の冷かさに急變して行つた。

『お止しなさいな。』

立上りざま、かう言つた彼女の聲までが變つたものになつてゐた。

『僕は……眞劍なんです。僕は貴女を戀してゐます。信じて下さい。僕は貴女がお好きなので す……』

しかしシナは返事すら與へなかつた。

――この人は何故あんなことを言ふのだらう。私を辱めてやらうとしてか……そしてシナの心も矢張悲しかつた。

『時刻ですわ、歸りませう。』

彼女は低く言つた。今別れるのがユリイには殘り惜かつた。が、彼れは充分に成功し得たものに信じ切つて疑はうともしなかつた。

『では、左樣なら。』

と彼女がさし延た手に、ユリイは身を屈めてその柔らかな溫い手に接吻した。異性が持つ强い魅惑が彼れの官能を刺した。シナは低く叫んで手を引つこめた。

『何をなさるの。』

とはいへ、彼れは逆上し相な喜悅に胸を躍らせ、禁じ得ない微笑のうちに去り行く彼女を見送つた。

十二

靜かに夕暮れてゆく窓外には、草花の薫りが香ばしく漂ひ動いてゐた。

サニンはテーブルに寄つて、赤々とさしこむ夕陽の光りで、小說に讀み更つてゐた。

と、誰か部屋の戸を叩くので、彼れが振返ると、そこにノキコヴの姿があらはれた。

『今日は』

彼れは書物を片附けて言つた。『何か素敵な事があるかね。』

『何もない。極めて平凡だ。』

ノキコヴは答へた。彼れの瞳には物悲しさが明らかに浮動してゐた。

最初、サニンは胸騷ぎしてゐるノキコヴを、哀慾に傷つけられたリダの前につれて行つた時、二人はそれを恐れて、互ひの胸に觸れ合ふ話は決してしなかつた。二つの、赤裸々な心と心を示

し合すことは、二人とつて心苦しい事には違ひなかつたらうが、沈默は彼等をより强い苦痛に陷入れる他の何者でもないと思つたサニンは考へた。それもいゝ。苦しむだけ苦しむことは決して無意義ではない。苦悶は人の心を洗禮する――で彼れはあの場合二人の自由意志のまゝにさせて置いたのであつた。

ノキコヴは默然として、沈みゆく夕日に對してゐた。と、彼れの心を察したサニンはゆつくり椅子を離れて、さて言つた。

『おい行かう。リダは庭にゐるよ。』

ノキコヴの顏はひき吊つた。そして髭を撫でる彼れの指先には顫へが見えてゐた。

『どうしたんだね、來給へつたら。』

サニンは彼れの肩に手をやつて戸外に押出すやうにした。

既に暮色が庭に下りてゐた。太陽の最後の光線は、ごす赤い明るみを木々の幹に燒きつけてはゐたが、灰色がゝつた牧場には、夜靄の淡い漂ひが見られた。

リダは川岸の草原に足を投げ出して、黃金色の燦きを打つ波のさゞめきに見入つてゐた。

一時は兄の力强い言葉によつて、呼び醒された彼女の心は、間もなく弱々しい哀愁に萎れて來たのであつた。今までに讀書した數多い書物は、當然の結果として彼女に自由な思想を與へた。自分が爲したことは人間の美しい自然の行爲であると彼女の理性は叫んだ。性慾の快樂を人に與へ、人から搾取するのに何の咎め立てられることがあらう。若しこの快樂が人生になかつたなら人生は幸福のオーシアスを失つた沙漠である。かう考覆する彼女であつて見れば、心の欲しるがまゝに官能的快感を貪る可き筈であるのに、理論と逆比して彼女の心は絶間ない苦しみに虐げられてゐた。そして彼女は人に會ふことを怖れ、母にさへ苦痛の情なくして顏を合せるに忍びなかつたので、暇さへあれば書物を抱へて庭園の孤獨に浸つた。

搾つけられるやうな激しい惱みに襲はれた時、リダは必らず兄を思つた。兄は少しも神聖でなかつた。純潔でなかつた。兄は不德と利己主義の權化だとすら言はれやう。

とはいへ、彼女が恥羞に頰を染める程の卑しさをも。隱さずに語ることの出來るのは實に兄のサニンだけであつた。彼れの身邊にある間のみは、統ての苦惱が馬鹿らしい取越苦勞であるやうな輕やかさを彼女は覺えるのだつた。

——兄でなくて、あれが他人であつたら……彼女は時こして胸を轟ろかせ乍ら空想した。が餘りにも破廉恥なこの假定はすぐ打ち捨てられてしまつた。

『ノキコヴ！』

彼女の追想は彼れに落ちた。奴隷の如く額を大地にすりつけて、彼れの宥しの言葉こ溫情に接したく、如何に彼女はそれを希ふか知れなかつた。

こ、背後に跫音が起つた。

そして、サニンとノキコヴが高い雜草を掻き分けながら眞直こ此方に來るのを認めた時、彼女はいよ〳〵恐ろしい機會が接迫した意識に、朦朧こした氣持に包まれてしまつた。

『リダ。』

サニンが元氣のいゝ聲で言つた。『ノキコヴ君を連れて來たよ。お前に言ひたいこ思つてゐる事は、自分でこの男が言ふだらう。本當に話したがいゝよ。僕は茶をのみに行つて來るからね。』

サニンはこれだけを口走るこ、振返らうこもしないで、雜草から木立の影へこ姿を消してしまつた。

しばらく、緊張した息苦しさが二人の間を流れた。

『リダさん。』

ノキコヴの聲には肺腑の底からしぼり出た嚴肅な沈痛さがあつた。この短い一語にリダは崇こられた花のやうにうち萎れてしまつた。

……この人も不仕合せに哭いてゐるのだ。矢張妾こ同じやうに——何一こ氣毒な、純潔な方であらう——リダは心の中でかう呟いた。

『リダさん、僕達は二人共幸福ではありません。けれごも、現在の不幸が聽て二人を幸福にするであらうこ、僕はかう信じてゐます。』

ノキコヴは悲痛に言つた。リダは非常な感激のために迸る涙の顏をあげて答へた。

『えゝ屹度。』

——神樣は知つてゐて下さるわ。妾は貞淑な妻こして貴方に愛こ尊敬の誠を捧げます——彼女の眸はかう彼れに哀訴してゐた。

こ、ノキコヴは俄破こ彼女の前に跪いた。そして細かく顫動ある彼女の手は、ノキコヴの熱い

唇におしあてられた。名狀し難い喜びの感情にリダは恍惚たる瞬間を味はつた。

——可愛い人、お氣毒な方……でも妾達は何て幸福なのだらう——リダは咽び泣きながら、彼れの柔らかい、絹糸のやうな髪に接吻の雨を浴せかけた。

そして二人の間には、永久變らじとの堅い誓ひの言葉が交された。

十三

ヴォロシンはある大工場の持主であつた。彼れの工場はペテルブルグに所在してゐるのだが、最近その工場にストライキが勃發した。彼れは勞働者側の强硬な要求に對する、彼等の押掛け訪問に迷惑を感じ、彼等と面談することを好まなかつたので、友のサルウヂンが住つてゐるこの小都市へ逃避して來た譯けであつた。

統ての蕩兒にとつて、女といふ言葉は、すぐに神經を尖らせ、常に着物を脱いでその露はな肉体を献げる時を連想せしめられるやうに、彼れもまた女の好きなその方面にかけては恐ろしい腕前と精力を持つてゐる男であつた。

ペテルブルグに於ける彼れの夜の世界は、卑猥な抱擁に明けてゆく連續であつた。金力によつて彼れに蹂躙され、飽くことを知らぬ彼れの慾望を滿足させる淫蕩な女の一群がそこにあつた。

彼れは夫れ等の女群を取殘して、この田舍の町へ到着した刹那から、この小都市に於ける若い女性の事のみに頭を支配されてゐた。

ヴォロシンは、その痩せた風裁の上らぬ體へ、雪白な眞新らしい服をつけ、多量の香水を撒き散らして青年士官の許を訪ねた。

サルウヂンは庭に面した窓口の椅子によつて、冷たい茶を啜つてゐるところであつた。

彼れの思考はリダの許に走つてゐた。

正直にいへば、サルウヂンはリダに恐れの心を抱いてゐた。あのいさかいの日以來、彼れはリダに會はなかつた。

『今後彼女はどんな態度を取るだらう。とにかく子供だけは關係のない者にして置かなくちや拙い。』

彼の心眼に、怨嗟をふくんだ美しい顔、赤い小さい唇、神秘的な色を湛えた眼のリダの俤が映

像した。

『あゝいふ意志の强い女は、容易に人を許すものぢやない……だが彼女に何程の事が出來るもんか。損をしたのは彼女許りで、二人の關係が世間に知れわたつたとしても、それは俺の美貌を多くの人に知らしめるゝ、結果を生じるくらゐのものだ。俺は彼女と結婚の約束をした覺えはないんだからな……』

ヴォロシンは其處へ來た。

『や、パビエル、リヴォヴキッチ君。』

珍客の來訪にサルウヂンは跳ね上つて叫んだ。

ヴォロシンは會釋すると、窓際によつて葉卷に火を點じた。その氣の利いた、如何にも都會人らしい垢拔けのした態度と立派な服裝はサルウヂンをして羨望の念を抱かせた。

ヴォロシンはにこやかな調子で、同盟罷工のある自分の工場の話などを始めた。が、遂に我慢を失つて、彼れ本來の持前であるところの女にその話の筒口を向けて行つた。

『それで僕は、今度此土地へやつて來た期會を利用して、君が便宜を計つて呉れるだらうと思つ

てゐるんだがね。』

ヴォロシンは瞬きをうち乍らかう言つた。

サルウヂンは得意の肩を動した。

『そんな事くらゐ、お安い御用だよ。』

二人は高らかに笑ひ合つた。

そして彼等の口から出る言葉は、猥切な女への感想で持切つてしまつた。

『ペテルブルグ人の君が、此土地の女に興味を持つてゐるつてのは、つまり未知の好奇心だよ。成程奴等は野性的で純朴ぢやあるが、全で男に對する手練手管つて奴をわきまへてゐない。』

サルウヂンのの報告はヴォロシンの樣子を變へてしまつた。彼れにはそれ程珍らしかつたのである。

『左樣かねえ。それぢや興味がない筈だ。その代り何だよ。ペテルブルグの女と來たら、肉體がなくて神經の塊りだよ。そのとは全反對だね。』

そして彼れはペテルブルグの淫婦達についての、耳を蔽はずにはゐられないやうな際どい點ま

で細かに物語つて、

『僕の見たところでは、女の尤も挑情的な部分は胸だね。』

と彼れは結んだ。

リダの雪白な、柔らかい、それは遠い、國の美しい果物を思はせる乳房をサルウヂンは心に描いた。彼女の胸に接吻した時、彼女はどれ程の喜びに○○○○○○……○○○○○○○○○○○○○

とはいへ、彼れはヴオロシンにリダの事を話すのを好ましからず思つた。で彼れは非士官的に見える、彼女への感情を隠して言つた。

『胸？——僕はまた、女に一番チャーミングを感じるのは脊中だよ。あの線の工合つたら……』

『左様だ。左様だ。』

ヴオロシンは調子をはづませて叫んだ。『或種の女は確かに……殊に若い女はね。』

極端な露骨さで、次から次へと彼れ等は猥談に熱狂した。サルウヂンは、かうした場合誰にも起り勝な、相手に自分の艶聞を誇りたい心理から、遂にリダの事を口走つた。

彼れはヴロオシンの面前に彼女の裸體を曝け出して悔ひなかつた。彼れは恰かも市場に賣買さ

れる女奴隷の如く、リダの肉體の尤も秘密な點にまでその鋒先を向けた。

彼れ等にとつて、女とは人間でもなければ、戀するものでもなく、情慾のために翻弄し凌辱する獣物と一つものであるかのやうだつた。

部屋中は朦々たる煙草の煙で密閉されてゐた。二人は野獣の如く眼を光らせ、唸りの聲を立てゝは喘ぎ合つた。そしてカラ〳〵と高らかに笑つた。

窓外は清朗たる夏の月明に彩られてゐた。とはいへ彼れ等の眼に蠢めくものは、無數の女の白い裸形のみであつた。と、その想像の翼は次第に濃く強く展げられて、彼れ等は是非リダを見ないでは承知出來なくなつてしまつた。

サルウヂンは從卒に馬車の用意を命じた。そして彼れ等は町端れの方へと馬を駛つた。

十四

マリア、イワノワナは意外な手紙を掌中にした。

それはサルウヂンから娘のリダに宛てたもので、是非一度お目にかゝりたいと切願した用件が

認められてゐた。

下婢が厨に置き忘れたのを、マリア、イワノワナは手にしたのであつた。

マリア、イワノワナは愕然としてしまつた。ある不幸な凶雲が純潔な自分の娘を蔽ひ隠してゆく氣が彼女の胸を曇らせた。どういふ所置に出たらよいか、彼女は途法に暮れざるを得なかつた

一瞬、マリア、イワノワナは自分の青春時代を追憶した。戀のことや、捨て去られた事や、さては結婚當時のあらゆる〇〇が彼女の心の原野の遙か彼方を、通り雲の翳のやうに走り去つた。

と、彼女は突然はげしい怖毛と、憎々しい怒りのために身をふるはせた。リダが——あの乳くさい小娘とばかり思つてゐたリダが——既に人生の幸福と歡樂が錯雜して苦痛と唯み合ふ混濁の世界に卷きこまれるやうになつてゐたかと思ふと、イワノワナはリダを大地に叩きつけ、踏み躪つてやりたい程の怒りに駆られてしまつた。

『何といふ見下はてた悪戯者だらう。』

彼女は自分一人ではこの解決を與へ兼ねる氣持がした。そこで彼女は息子のところへ相談を持つて行くことにきめた。

サニンはテーブルに向つてペンを走らせてゐるところであつた。彼れがそんな風にしてゐるのを滅多に見たことがなかつたので、マリア、イワノワナはこんな際にもかゝはらず、サニンに珍らしさを感じた。

『お前は何を書いてゐるんだね。』

と、サニンは落付のある物靜かな視線で振返つた。

『手紙です。』

『誰に出す手紙だね。』

『昔の友達が新聞記者をしてゐましてね、僕は奴の編輯局へ勤めたいと思つてゐるので……』

『何故そんな處へ行くのです。』

『だつてお母つさんの傍にゐたんでは、ちつとも面白くないですからね。』

『有難う。』

彼女は皮肉に言つた。もしこの場合サルウヂンの手紙が彼女を不安にしてゐなかつたら、サニンのこの無作法な言葉を許して置くやうな彼女ではなかつた。けれども今はもつと大事な問題が

控へてゐる……

『何つて情けない事でせう。男の子の方は獅子か狼のやうに家をとび出したがるし、娘の子は娘の子で……あゝ。』

『それがどんなことになりますね。』

と、サニンはペンを指から離して奥ありげに母親を見上げて言つた。息子の視線を受けた彼女は不意に眞赤になつた。手紙を窺み取つた事が堪らなく愧かしくなつたのである。

『お相憎樣乍ら、私は盲目ではありませんよ。チヤンとこの兩の眼は物を見ることが出來るんですからね。』

彼女は顏をふくらませて吐き出すやうに言つた。サニンは小首を傾けた。

『ところがお母つさんは盲目ですよ。貴女には何も見えやしないのだ。何故つてリダが最近結婚する事すら貴女は知らずに居るぢやありませんか。』

『何だつて！』

『貴女の娘は結婚します。』

『相手は誰です！』

彼女は急きこんで訊ねた。

『ノイコヴに決つてゐるぢやありませんか。』

『ノキコヴ……するとサルウヂンさんはどういふ事になつて來るね？』

『あんな畜生は抛つて置けばよろしい。』

『だつて妾には解らないよ。』

彼女は顫動せん許りに狼狽した。リダが結婚する。リダが結婚する……早鐘のやうに彼女の頭はこの一事で惑亂した。

『これ程明瞭な事はありませんよ。あれは最初サルウヂンを愛した。第二にノキコヴを愛してる。その次に第三の誰かを愛するでせう。それを關渉する權利は何人にもない筈です。』

『馬鹿をお言ひでないよ。』

彼女は腹立しくなつた。

『お母つさんだつて左樣だつたに違ひない。それとも貴女は一生を通じて一人の男にのみ愛のす

べてを捧げたと公言出來ますか。』

マリア、イワノワナは思はずとび上つた。

『何といふ言草です。母親に向つて！』

『誰がです。』

『誰かとは何です。』

『成程ね、世間は言はないでせう。が、左樣だからつて僕が言はれぬ理由がない。ねえお母つさん、貴女は既に人生の大部分を終つたんだ。だからこれから人生を自分のものにしようとしてゐるリダの意志を拒る資格を貴女は持つてゐません。』

彼女は呆然としてしまつた。この子は母親に向つて何といふ事を命令するのだらうと、彼女はサニンの意中を計り兼ねて迷つた。と、サニンは彼女の手を握つて物穏かに言つた。

『リダの事はリダに任せてお遣りなさい。』

その情愛を湛えた樣子は、年寄つたマリィ、イワノワナの心を和げた。

『左樣だねえ。サルウヂンの方は斷らなくちやならない。妾もノキコヴは氣に入つてゐますから

ね。』

サニンは笑つた。彼女も笑つて言つた。

『リダは何處にゐますね。』

『自分の部屋に。』

『ノキコヴは？』

『それは解らない！……多分……』

サニンがかう口吃つてゐる時であつた。下婢はサルウヂンと今一人の知らない紳士が訪ねて來た事を取次いだ。

『よし追ひ歸つてやらう。』

サニンと母親は戸口へ出て行つた。

二人の姿を見ると、サルウヂンとヴォロシンは馬鹿叮嚀に頭をさげた。その調子はづれの慇懃さは、兎に角應接室へ案内される事に成功した。

サルウヂンは彼女にヴォロシンを紹介した。初對面の挨拶がかはされた。が、彼女の態度は思

ひきつて冷めたいものだつた。

サルウヂンは、自分の輕舉を悔ひてゐた。こんな處へ來なければよかつた、自分に向けられる彼女の眼光には明らかな敵意が仄めいてゐた。この婆、俺とリダの關係をもう知つてゐるな——彼れはそれを感付いた。そして少なからずはら〳〵した。が、ヴオロシンの手前、つとめて平然たる態度を裝はねばならぬのが、彼れは苦しかつた。

ヴオロシンは、彼女の質問——いつ頃この町へ來たか、この土地が氣に入つたか等々——に對して上の空の返辭を答へ乍ら、一刻も早くリダを見たい欲求にいら立ちきつてゐた。そして彼れもまた自分の氣持を隱蔽することに腐心してゐた。

假面をかぶつた談話に辛抱しきれなくなつたヴォロシンは、意味ありげな視線をサルウヂンに呉れた。早くリダを呼び出して見せて呉れないかとの督促であることは、始めから石のやうに押し默つてゐたサニンにもすぐ了解された。

『リダさんはどちらに？』

サルウヂンは何氣ない振に訊ねた。

『自分の部屋にでも居るんか……私は知りません。』

マリア、イワノワナの答は無愛相なものであつた。

『私はお宅のお嬢さんについて、いろ〳〵なお噂を伺つてゐますので、是非一度御紹介が願ひたく思つてゐるのでございますが……』

と、ヴオロシンは白い齒を剝き乍ら言つた。この淫蕩者らしい痩男は、リダを見たがつてゐる墮落した若い娘を試驗の秤にかけたがつてゐる……母親の頭にはかうした考へが閃めいた。サニンは慾つた。

——此奴等を追出してしまはないと、妹やノヰコヴは決して幸福にはなれまい——で彼れは思慮深い眼を下に落し乍ら、出拔にサルウヂンに言つた。

『君はこの町を去るつて本當かね。』

サルウヂンは面喰つた。

『……いや……その何でせう。一二ヶ月休暇を貰つて、ゆつくり靜養しようと思つてゐるのですが、多分そのお聞違ひで……全く、同じ土地ばかりにゐては退屈しますからね。』

サニンは聲高に笑つた。どうして世の中の奴等は、片つ端から眞實を語らうとはしないのか、見えすいた嘘僞の言を弄ばうとするのだらう。

『その御旅行は屹度結構でせうよ。』

サニンは云ん乍ら腰をあげた。

『えゝ？』

サルウヂンは曖昧に訊ね返した。何かしら尋常でない雰圍氣に一室は領せられた。

ヴオロシンは眼球をぐり〳〵動かして、自分の帽子の置き場所を探した。

サニン彼れの帽子を取り出すと、默つてその面前に突きつけた。ヴオロシンは口を開いて白痴みたやうな呆れた表情をした。

『これはどうしたお心算です。』

『人を馬鹿にしてゐる！』

ヴオロシンとサルウヂンが同時に叫んだ。

『それはこんな心算からだ。』とサニンはおさまり返つて言つた。『可加減に尻尾を卷いて逃げ出した方が君達に取つて安全だらつてのさ。』

サルウヂンは狂暴な顏付をして一歩踏み出した。

『解つたよ。君が何を言つてるつかつて事が。』彼れの聲は咽喉に詰つて奇妙に響いた。

『出て行け！』

サニン大きく威嚇した。

『何が何だか要領を得ない。』

ヴオロシンは不平らしく小言に呟いた。

この時であつた。リダが入口の扉の前にその姿をあらはしたのである。

『さあ、妾は出て來たわ。御用があるのでしたら、どんな事でも承りますわ。』

彼女は嚴然として言ひ放つた。一同は不意を喰つて彼女をまじ〳〵と見戍つた。

未だ曾つて、この時くらい大きな屈辱を感じたことはリダの生涯を通じてなかつた。かくまで強い身心の鞭を感じたことはなかつた。彼女は衣を剝ぎ取られ、衆人の面前にさらされる女奴隷にも劣らぬ自己侮辱を忍んで、しかも彼等の前に立ちあらはれずにはゐられないのであつた。

『妾は來ましたわ。貴下方は何處へ行かうとなさるの、帽子をお脱ぎなさいな。お話しいたしませう。』

彼女は誇らしくかう言つた。

二人が立ち去つた後でリダは痛々しいまでに打ちしほれてしまつた。

『おいどうしたんだい。』

サニンは彼女の手をとり乍ら慰め顔に訊ねた。

『構はないで下さい！妾は世の中が恐ろしくなつて來たわ。』

そして彼女はさめ〴〵と泣き出した。

『何がお前をそんなに泣かせるんだ。何でもない事ばかしぢやないか。』

『もつと……この世に善人のものがゐないのかしら？』

と、彼女は口の中で述懐した。

『ゐないさ。人間は統て惡魔さ。善人を期待するから過ちに對して後悔の念に苦しめられるんだ

よ。』

『では、兄さんは人間に善い事はないと思つてゐるの。』

『期待しないさ。決して。』そしてサニンは言つた。

『僕は何時だつて孤獨だよ。』

十五

その翌日である。サニンは庭の掃除に餘念がなかつた。と、下婢のヅンカが横飛びのやうになつて、彼れのそばに走り寄つて言つた。彼女は跣足のまゝであつた。

『若旦那樣、軍人のお方がお見えになりましたよ、貴方にお目にかゝり度いつて――』

それはサニンの豫期してゐるところであつた。であるから彼れは驚ろかされはしなかつた。彼れは、サルウヂンの方から挑戰的態度に出て來るのを待つてゐた位である。

『よし行くよ。』

彼れはサーベルを木の幹に立て、帶を締め直すと、例によつて落付いた濶歩で母家の方へ引き

返して行つた。

――何こいふ馬鹿者だらう。本當に、銘向の鈍間つたら奴等のことだ――

母家の前を通るときであつた。彼れはリダが蒼ざめた憂はしい顏をしてドアーの入口に立つて何か物いひたげな樣子であるのを見てとつた。彼女は、今日の訪問者がこの樣に恐ろしい用件を携えて來てゐたか想像されるのであつた。そしてそれは自分が原因してゐる……自分くらゐ罪深い女はないと、彼女は强い苦しみを胸に覺えてゐたのだつた。

マリア、イワノワナも左樣であつた。年取つた、憔悴の色の見える母親は、彼女が何時も居つけの部屋の椅子の肘掛に身を支へて、悲しげに、おど〳〵として何事か哀願するやうな眸で、前を通るサニンを眺めるのであつた。

應接室では、タナロブとフォン、ダイツ（フォン、ダイツはタナロブ等と同じ士官で、馬のやうな顏をした男だ。大のトルストイアンで、サニンとは一二回一つ場所で酒を飲んだこともあれば、思想上の議論を戰はしたこともある。）が、ふんぞり返つて構へてゐた。

『やあ！　今日は。』

サニンは磊落に聲をかけた。『何か御用事ですかね。』

と、タナロブが、おそろしく取り澄して、軍隊式な切口上で口を開らいた。

『我々は、我々の友人、キクトル、セルゲイキッチ、サルウヂン君の代人として君の確答を求めに來た光榮を與へられてゐます。』

『で？』と、サニンは口を大きく開らいて嘲笑的に訊ねた。

『サルウヂン君の意見によればですね。君の昨日の態度は……』

『よろしくないと仰有るのですか。左樣、この方面から見ても惡るかつたでせう。』

『そこで、我々の親友サルウヂン君はです、君に前言を取消されん事を要求してゐます。』

『左樣ですとも。實にその通りです。』

と、のつぽのフォンダイツが横合から叫んだ。恰かも合槌を打たねば自分の義務がはたされないかのやうに――。

『撤回しろつて……うむ……サルウヂンにかう仰有つて貰ひませう。言葉つてものは、小鳥ぢあないんだつてね。一度口から出てしまつたものを二度と摑まへる事は出來ないんだつて。』

タナロブは呆氣にとられ、眼を剝いてサニンを見詰めた。が、すぐ眞赤になり、興奮した早つ口でなぢり寄つた。

『サニン君、我々は冗談を聞くために此處まで來たんぢやありませんぞ。君は君の前言を取消しますか。取消しませんか？』

『僕がサルウヂンを玩具にする氣だつたら、取消さぬものでもない……』

と、サニンはやゝ態度を改めて言つた。『しかし、あれは君達まで驚がせる程價値のある事件でもなさ相だよ。第一僕は彼奴の馬鹿を輕蔑してゐる。第二に僕は彼奴といふ奴を虫が好かないんだ。だから前言を撤廢しないのさ。』

『すると何だ……』

『サルウヂンが決鬪を申込んでゐると言ふのだらう。ところで僕は決鬪は御免だ。』

『どんな理由をもつてです。』

『重なる理由は、僕は自分を殺したくないからだ。その次にサルウヂンを殺したくないから…』

『決鬪を拒絕するつて！』

と、フォン、ダイツは出拔に火が燃え移つたやうに喚めき立てた。彼れは紅蟹のやうになり、ペッ〳〵唾を吐きとばしながら『君は僕等を愚弄してゐる。許すことは僕は斷じて出來ないぞ。』

『そんなに憤慨するものではないさ。兎に角奴は馬鹿だつて僕がさう言つたと傳へて呉れれば、君はそれでいゝぢやないか。』

『そんな權利が君にあるか！』

フォン、ダイツは金切聲で叫んだ。と、タナロブは彼れを制して、

『まあいゝさ。歸らう。』

『いゝや、僕は歸らないぞ。』

この場の經緯に掛り合つてゐるのがサニンには馬鹿らしくなつた。彼れは二人の者に取合はうともしないで出口の方へ行きかけた。と、後からタナロブが呼びかけて言つた。

『サニン君、僕等は責任上この場の有樣を詳しくサルウヂン君まで報告しますから。』

『御隨意にやつて下さい、』

そして彼れは扉の外へ出て行つた。背後に怒號するフォン、ダイツの聲に輕侮の笑みを投げつ

け乍ら……

『兄さん一寸――』

リダは自分の戸口から首だけを出して小聲に呼びかけた。

『どうしたんだい？』

『一寸でい、から這入つて頂戴。話があるの。』

で、サニンは這入つた。白紛や香水の高い匂ひで彼女の部屋は花園のやうな薫香に充ちてゐた

そして樹木の葉枝によつて殆んど窓をふさがれた室内は、暗い綠の色に反射されてゐた。

『何てい、匂ひだ。』

サニンは鼻を蠢かして言つた。『話つて何だね。』

リダはすぐには答へなかつた。惱ましげな吐息がその唇を洩れた。

『どうしたんだね。おい。』

『兄さんは……』彼女は努めて兄を見ないやうにして訊ねた『何故決鬪をお斷りなすつたの？』

『斷つたさ。』

リダは首垂れた。

『それがどうかしたのかね？』

リダの頰には慄へが見えた。彼女はくるりつと振りかへると、極めて低く口早に言つた。

『妾には……その譯が解りませんの？。』

『解らないかい。お前はいぢらしい娘だねえ。』

かう言ひ捨てるとサニンは構はずに出て行つてしまつた。『人間て奴はどうして斯うまで五月蠅く出來てゐるんだらう。』彼れはあらゆる形をとつた人間共が自分を包圍して、善惡美醜の交渉を持つてくるのを、がつかりした氣持でかう呟いた。

一六

既に日は地平線に沒してゐたが、まだ晝間のやうに明るかつた。空は清く爽やかにすんで、庭は一面の露を見せてゐた。それは一年に何回と見られない、異常に朗らかな宵の一つであつた。

サニンとワイノブは公園の並木路を歩いてゐた。サニンは帽子も冠らず、青色の大きな綿布の

上衣をつけて悠然と歩るいた。その上衣は兩肩のこころの色が褪せてゐた。
『でね、僕は決闘を申込まれたのだよ。』
『そいつは痛快だ。相手は誰奴だね。そしてどうしたね。』
『相手はサルウヂンさ。僕が追つぱらつて遣つたので奴さん憤慨してね。』
『勿論君は承諾したんだらうね。一發の下に奴をやつゝけてしまひ給へ。奴の鼻をへし潰してしもうさ。』
『鼻は容貌の中心點で尤も大切な處だよ。僕は謝つたのだ。』
こゝ、サニンは笑つて答へた。
『それも宜らう。決闘て奴あごう考へたて正氣の沙汰ぢやないからね。』
『こころが、リダこ來たら正氣に考へてゐる。』
『お嬢さんてものはえてお目出度いものさね。』
かういひ乍らノブコブは卷紙に刻煙草をつけてマッチをつけた。
公園ではいつものやうに音樂が演奏されてゐた。數多い夕べの散策者達は、眞黑い一衆團こなつて軍樂隊を取まいてゐた。

官吏、學生、令嬢、士官、長靴をはいた青年、すべての階級を網羅した聽衆は、おし合ひへし合ひ、騒々しい樂の音こ、樂長の氣取りたつぷりな指揮棒の動きを耳こ目にしてゐた。
二人はそこでソロヴィチクに出會つた。彼れは兩手を背中に組み、下目勝に、何か重大な心配事でもあるかのやうな樣子で、近くの並木の間をぶらついてゐた。
『よう！　恰度僕達は今君の家へ行つたこころだよ。』
こ、サニンは元氣よく聲をかけた。
『それは失禮しましたね。』
ソロヴィチクは叮嚀すぎるくらゐ慇懃に答へた。『どうか惡く思はないで下さい。少しも知らなかつたものですから、つい散歩に出てしまひましたので……』
『一緒に歩かう。』
こ、サニンは彼れの腕をこつて組み合せた。ソロヴの面に喜ばしげな色がさつこうかんだ。サニンこ腕を組み合せて歩るく彼れの樣子は、まるで何か大切な寶物でもかゝえてゐるかのやうで

あつた。

彼れ等は群衆を避けて横道へは入つた。そして公園の端まで來たので、後戻りをしようとしたこの時であつた。前方の曲り角から二人の士官と、脊の低い一人の紳士が姿をあらはした。それはサルウヂンとタナロブとそしてヴオロシンであつた。

不意の會合に、士官は少なからず狼狽した。と、サルウヂンの容貌はさつと變つて彼れの體は弓のやうに反りかへつた。

『あの雌鳥はまだこの町にゐるんだね。』とイワノブはヴオロシンの事をサニンに眼付で語つた。

『あゝ、ゐるとも。』

そしてサニンはから〳〵と笑つた。と、その笑ひ聲が自分に浴せかけられたのだと思つたサルウヂンは、狂暴な怒りの衝動に突き出された。彼れは我を忘れてツカ〳〵とサニンの前に進み寄ると。

『僕は君にこれ丈をいふ權利がある……君は僕から決鬪を申込まれたらうが。』

『それがどうしたのだ。』

『にもかゝはらず、君は何故拒絶したのだ。卑くも男子たる可きものが……。』サルウヂンは息詰るやうな嗄れ聲でつめ寄つた。彼れの右手に握られてゐる乘馬用の鞭は、汗ばんだ掌に強く握りつぶされやうとしてゐた。

近くを散歩してゐた人達が小走りに集つて來た。その中にはユリイもゐた。シナと老嬢のヅボブも混つてゐた。

『おい、どうしやうてんだ！　君は！』

イワノブがサニンと士官の間を堰き止めて叫んだ。

『拒絶するさ。愚にもつかない！』

サニンはサルウヂンに答へた。彼れの態度の山のやうに泰然自若としてゐるのに反して、その眼光は突き刺すやうに鋭かつた。

『念のためにもう一度駄目をおすが、君は斷然拒絶する氣かどうか！』

サルウヂンは齒がゆい程堅い聲で一歩進み出た。

――さあ、大變な事になつて來た……この人は腕力に訴へやうとしてゐるいけない〳〵――

ミソロヴィチクははら〳〵した。彼れは顔の色を變へ、サニンを擁護し乍ら言つた。

『これ！　亂暴な眞似をなさつては……』

が、逆上した士官に見えるものは、サニンの瞳のみであつた。火のやうな鋭ごさと氷のやうな冷靜さをもつてゐる不思議な彼れの眸ばかりであつた。

『何遍答へろといふのだ。僕は既に君に答へたぢやないか。』

ミサニンは落付いた聲で言つた。

同時に士官の感情は極度に昂進して、周圍の物がくる〳〵廻り出した。あはたゞしい足音、痛高い女の叫び聲――これらのものは遠くの森をすぎ去る風のやうな氣がした。こ、彼れは得體の知れぬ力の衝撃にまかせて、頭上高く鞭を振りあげた。

その刹那、サニンの逞ましい腕は電火のやうにのび、大きな拳骨は石のやうに堅い響を立てゝサルウヂンの頰を強く打ちのめした。軍帽がこんだ。

『……』

何を言つたのか解らぬ叫び聲ごゝもに、サルウヂンは草の上に倒れた。彼れには最早何も見え

なかつた。何事も意識することが出來なかつた。最大の侮辱感ご燒けつくやうな痛みを面部に感じた……

俄然ごして周圍は騷々しくなつた。シナは物恐ろしさの聲をしぼつて叫んだ。

ヴオロシンは鼻眼鏡を失ひ、水に浸つた草原を一目散に逃げ出した。そのために彼れの純白なズボンの下半部は泥まぶれであつた。

タナロブは歯を剝いてサニンに攝みかゝらうごしたが、イワノブのために突きとばされた。

『は、、……詰らない。』

サニンは何處を風が吹くごいつた調子で低く言つた。ごはいへ、その調子には故意らしい快活さがあつた。

のめり倒されたサルウヂンの片頰は左の目がふさがつてしまつたほど見る〳〵うちに紫色にふくれ上つた。血は鼻ごロから溢れ出て、血綿を嚙んだ唇は引き吊りのやうになり、恰かも彼れの樣子は、あの美男子が一瞬にして癲患者のやうな醜惡をつくしたものに急變してしまつたもの、如くであつた。

彼れは倒れては又起き上り、よろ〳〵としては又倒れ〳〵した。土砂を嚙んだ口からは幾度となく血の混つた唾を吐いた。

『行かうよ。』

とイワノブが言つた。

『あゝ行くとしよう。君。』

とサニンに聲をかけられたが、ソロヴィチクは、洞穴のやうに眼と口を開き、倒れた士官の血汐に見入つて動かうともしなかつた。恰かも失神したかのやうに。

イワノブは腹立しくその肩を引いた。すると彼れは兩の手でしかと木の幹に抱きつきしく〳〵聲で泣き出した。『あゝ……貴兄は何故こんな……酷い……酷いことを……』

『野蠻極る——』

と、最初からの樣子を眺めてゐたユリーが、サニンに向つて眞正面からかう言つた。

『野蠻……全く野蠻だ……しかし僕は自分が毆り倒されたより、この方がいゝと思つてね。』

サニンはユリーに答へると小徑の方へ行つてしまつた。イワノブもそれに從つた。

『何といふ無賴漢共だらう。實に穢らはしい……』

ユリイは救ひ難き人々といつた風に嘆しく呟いた。そして一人で淋しく公園を出て行つた。

十七

サルウヂンはタナロブが用意した馬車で家に連れ歸られた。その中途、馬車の中で、彼れは今まで順調に、權威と信望を保つて來た自分の生活が、忽ちにして泥土に突き落されてしまつた氣がした。

彼れは大仰に呻つて、自分が如何に痛さに苦しめられてゐるかを訴へようとした。が、それは眼を開くまいと警戒する心からなのであつた。何故といつて、彼れは幾萬とも限りのない眼が上下左右から自分を凝視し、この不面目を嘲ざ笑つてゐるやうな氣がするので、それを見まいとして避けるために瞼をとぢてゐるのであつた。

馬車は町の辻を曲る度にひどく傾いた。そんな時彼れはそつと、涙につゝまれた瞳を細く開いた。と町筋や、通行人や敎會の建物なぞが映つた。外界の統ては以來のまゝである。何一つ變つ

てはゐない。けれども現在の彼れの心には、何も彼も自分を見離して遠くの處へ自分丈を置去りして行つたやうな氣持がした。

摺れ違ふ人々は、眼を丸くして馬車の上を送迎した。その度に彼れは堪え難い侮辱の絶望を感じ、慌てゝ、瞼をとぢ、そして大仰に呻き立てるのであつた。

道は彼れに取つて永遠の長さであるやうに思はれた。もつと早く……もつと早く……彼れは衆人の注目に堪え兼ね、夢中でそれを祈つた。が、家に着いた時の、自分の從卒、家婦、隣人等から驚ろいて迎へられる光景を想像すると、その恥辱よりは、いつ迄も馬車にのつて運び去られる方が、遙かに心苦しくないとも彼れは考へるのだつた。

タナロブは、傷ついたサルウヂンと一つ馬車で、行き會ふ人毎に見られるのが體裁惡くて仕方なかつた。俺は何も知らない事だ。やつゝけられたのはこの男だけで、俺ぢやないのだ。と、タナロブは自分に注がれる視線に一々かう熱心に證明したかつた。で、彼れはサルウヂンを支へてゐるといふより、寧ろ突きのけるといつた風な抱き方をしてゐた。

サルウヂンには本能的にタナロブの心理が讀めた。そしてその意識は彼れをより強く悲觀させ

た。――つい今の先まで自分を崇拜し服從してゐた此奴までが、自分と席を一つにしてゐるのを周圍に對し、俺に對して恥かしがる權利を持つて來たとは……あゝ何も彼も滅茶々々だ――

家に着いた。

從卒は仰天して駈け寄つた。そして彼れは此處でもタナロブと從卒の肩をかりて部屋へ運ばれねばならないのだつた。

二人は彼れを寢臺に横らせた。忠實な彼れの從卒は、狼狽し乍ら湯と手拭を持つて來て、念入りに彼れの顏や手の汚れを拭つた。

『大尉殿、大變な御災難でございましたな。誠にもつて、その、何と申上てよろしいやら……』

從卒は氣を兼ねた小聲で後半を獨言のやうに言つた。

『默つてゐろ、貴樣なぞの知つた事ぢやない。』

タナロブは叱りつけた。が、彼れはそれと同時に憶病な目付でキヨト〳〵四邊を見ましたそして窓際へ行くと喫はうとした煙草を取り出した。がまた、喫煙するのはサルウヂンに對して惡い氣がしたので、煙草の罐箱を急いでポケットに突込んでしまつた。

從卒は直立不動の姿正で彼れに言つた。

『醫師をお呼びしませうか』

『さあ、呼んで好いか、惡いか、僕には……』

二人のこの問答を聞いたサルウヂンは慄つとした。この化物のやうな面を醫師に見られとは…

『呼ばなくてもいゝ。』

彼れは弱々しい聲で遮つた。そして、かうして俺は死んでしもうのだ。と努めて左樣思はうと

した。

血と泥とを拭ひ去られて見ると、彼れの顏は以前のやうに物凄いことはなかつたが、そのかは

り醜く、且つ慘めなものであつた。

タナロブは獸のやうな好奇心をもつて、チョイ〳〵横目で彼れの樣子を見ては、すぐ目をそら

した。それは極めて巧妙な、殆んど氣づかぬほどの動作であつたが、病的の鋭さをもつて周圍の

事を感じるやうになつてゐるサルウヂンの神經には、はつきりと響いてくるのであつた。そして

絶望が息の根をとめんばかりであつた。彼れは急に顏を六ヶ敷く歪め、とぎれ〳〵の癇高い聲で

喚めき出した。

『構はないでくれ。僕に構はないでくれ……』

タナロブはギョッとして素早い横目を走らせた。と突然彼れの内心にサルウヂンを輕蔑する念

がこみ上げて來たのである。

『へん、まだ喚いてやがる！　何て意氣地のねえ弱味噌なんだい！』

彼れは口の中でかう呟いた。そして非常に小氣味よく思つた。彼れは窓を指先で叩いたり、髭

をひつぱつたり、きよろ〳〵したりして、こんな氣の詰る面白くもない處から、一刻も早く出て

行きたいといふ要求を漸く厭へつけてゐた。彼れには馬鹿々々しくて、退屈で、一寸も早くサル

ウヂンが眠りこめばいゝと、冷淡な願を感じてゐるのであつた。

と、絶えず躰を動かしてゐたサルウヂンが、急におとなしく靜かになつた。

『奴さん、寢こんだようだぞ……』

とタナロブはそつとサルウヂンに注意した。『うむ、寢こんでしまつた。此奴は巧い……』

彼れは拍車の音のせぬやうに用心しながら、こつそり出て行きかけた。サルウヂンはぱつと眼

を開いた。彼れの足はその一瞬に躊躇した。そして二人は互ひの心を見破つてしまつた。で、彼等の間は。變挺な、實に氣拙いものになつてしまつた。

サルウヂンはすぐ眼を閉ぢてしまひ、タナロブは彼れは寢込んでゐるのだと强ひてかう考へようとした。そして見破られた恥かしさに後戻りすることも出來ず、こそ〳〵と室外に拔け出して行つた。

扉は音もなく閉められた。と同時に、あれほど堅く、親密に交際し合つてゐた二人の表面的な友情が、忽ち永久に消へ去つてしまつた。

往來に出たタナロブは、自由な、肩の凝りが一度に下りたやうな氣輕さを感じ、永い間の友情の一切が破綻した事にも、別に殘り惜しいとも思はずに、かう一人語つた。

『畜生！　何て体裁の惡いこつた。あんな奴こいつ迄もか、り合つてゐると、終ひにはこの俺までが飛んだ捲き添へを喰はにやならんわい。今晩の事件について俺は何の關係もなかつたのだつて事を一般に知らせて置く必要がある。名譽にかけてもな……。さう〳〵、俺はこれから將校集會所へ行つて、散々奴の無樣を喋り散らしてやらなくちや……』

從卒は、萎ア臭い萎びた顏に始終惜へた色を走らせながら茶沸器の用意をこ、のへたり、葡萄酒を取りに立つたりして彼れの面倒に勞を惜もうとしなかつた。

『大尉殿、葡萄を召上つては……』

彼れは蚊のやうな聲ですゝめた。

『うむ？　何だと？』

サルウヂンは瞼を開いたが、すぐ閉ぢた。が、今度は顏をしがめ、脹れ上つた唇を醜く歪めてかう呟くやうに言つた。

『鏡を……くれ……』

そして、――今更自分の顏を寫して見たところで始まらない――と心では鏡を退けてゐたのである。

が、從卒は主人の命令に忠實であつた。

暗い、鏡の底には一方の目が塞つた、髭のみだれた、青いやうな、黑いやうな、紅いやうな色にむくれ上つた顏が薄氣味惡く自分を見詰めてゐた。

彼れは嘆息した。何こいふ顔だ――突然彼れはヒステリックに啜泣きを始めた。

『えゝ、もう不用い……』

『大尉殿、何をそんなに落膽なさるのです。傷は、すぐもこの様になります。』

從卒は氣の毒相に慰めた。

『お前、彼方へ行つて居れ。』

彼れにはこの廣い世の中に、從卒一人だけが自分の同情者であるもの、やうに思はれた。この感謝の念は、從卒ですら俺を憐れみ得るやうになつたのだこいふ意識のために忽ち打ち消されてしまつた。

從卒は泣き出したいやうな顏をして、眼をしば叩き乍ら、彼れの部屋を石段の方へこ出て行つた。

『何も彼も最後だ。』

彼れは腹の中で泣きながら考へた。『何が最後になつたんだ。何も彼もがお仕舞になつてしまつたのだ。一切の俺の生活が……そいつが亡んでしまつたのだ何故？　何故つて俺の名譽が泥の

中に突き落されたからだ。俺は犬のやうに毆りのめされたんだ……大切な顏を……拳骨で……かうなつたらもう聯隊に止まる譯にはゆかない……』

あの公園の小徑の中で、小さく震へながら蹋まつた我自らの姿が、彼にはハツキリこ見えるやうな氣がした。

彼れの懊惱は更に次の考へこに移つて行く。

『……若しあいつが俺の申込みを承諾したこしてゐたら？……勿論二人は決鬪する。そこで奴の彈丸が俺の顏に命中したら……迚もこんな痛みや苦しぢや濟むまい。けれ共それがために誰一人俺を輕蔑しはしないだらう。寧ろ眞心からの同情を寄せるだらう。して見るこ、彈丸こ拳骨こ――一體その間にどれだけの相違があるのか？　どんなに違つてゐるのだ。何故？　そんな大きな相違が生じるのか？……』

思惑は稻妻のやうに飛んだ。

彼れは遣瀬ないやうに、兩手で摑んだ頭を振つた。こ、眼球の底に薄氣味の惡い鈍痛を感じたこ、彼れは突然彼れ自身ながら怖ろしく感じる程の忿怒の發作に逆上した。

『ピストルを取つて、跳りかゝつて、奴を射殺してやる。奴が倒れる時には顔でも腰でも蹴破つてやれ！　眼も歯も滅茶々々に！……』

濕布が重い音を立てゝ床の上に辷り落ちた。彼れは吃驚したやうな眼を開らいて、ほの白い室内にあるさま〳〵な器具を見た。

『いや？　同じ事だ。そんな事をしたからつて、俺の名譽が恢復されはしない。』

絶望的な考へは彼れを無氣力にした。『同じだ。群衆は見てゐたのだ。俺が頬つぺたをやられた所も、四ん這ひになつた所も……あゝ、俺は毆られたんだ。毆られたんだ。この鼻つ面を……もう默目だ。俺の自由と幸福は永久に取返しがつかなくなつてしまつたのだ……』

『いつの間にか彼れは昏睡狀態に陷つたらしかつた。部屋も蠟燭の光りも何處かへ消へ失つてゐたから。が、頭の中はとりとめもない考へを中止しなかつた。そして闇の中からあらはれて來た蠟燭の光りとともに、意識を取りもどした彼れは、自分の思想を條理立てようとした。

『俺はもう生きて居られないのだ。こんな不名譽を受けて尙且つ……うむ。左樣だ。死なゝければなるまい。だが、俺は死にたくない。俺が死ぬ事によつて誰が有難味を蒙るのだ。俺には確

かに無役だ。すると世間の噂？のためにか。待つてくれ、世間の噂と俺の死とにどんな關係があるのだ。しかし聯隊はどうしても出なければならん……すると、今後俺は何によつて生活するのだ？』

夜は遲かつた。蠟燭のほやけた灯はほた〳〵涙を流しながら力なく燃えてゐた。窓の外には重苦しい沈默が迫つてゐた。恰も、世界中で彼一人のみが苦しむために生きてゐるやうであつた。

混沌とした意識の中を、思ひ出や想像や感情や、考慮の斷片が急しく交叉する中を、何事よりも强く瞭然と彼れの心に烙きつく一事は、自分が全くの狐獨者であるといふ寂しい知覺であつた。多くの、知人の顏が順々にうかみ上つて來た。彼れ等は蒼ざめた、不愛相なまるで外國人のやうによそ〳〵しかつた。

この時、彼れはリダの事を思ひ出した。

彼女は、彼れの前に最後に別れた時のまゝの姿であらはれた。大きな悲しい眸と、平常着の下につゝまれたなよやかな肉体と、亂れ散つた頭髪の姿をして。彼女の表情には敵意も輕蔑の色も彼れには見えなかつた。が、彼女の眼には、悲しく吐りつける時の閃めきが籠つてゐた。

彼れは思ひ出した。あの時自分が如何に冷淡に彼女を扱つたかを。彼女の悲嘆が如何に大きく強いものであつたかを。

彼れは刄をもつて胸を剝られるやうに鋭い後悔を覺えた。

『あれの苦しみは、迚も〳〵今の俺の苦しみのやうなものではなかつたらう……それだのに俺はあれをつきのけてしまつた……いや、それごころか、死んでしまへばいゝこさへ、あの時の俺は希つたではなかつたか……』

彼れは唯一つ與へられた避難所――リダの愛こ同情に縋つて現在の苦痛を償はうこ急いだ。こはいへ、リダは既に完全に彼れの物でないここ、すべてが終つた事をサルウヂンはよく知つてゐたのである。

彼れは災のやうに熱い頭をおさへ、慄へる手足をよろめかしながら、寢臺を立ち上つて漸くテーブルのこころまで行つた。

『すべてが最后になつた。生活も、リダも、何も彼も……』

『左樣だ。俺はごうして此上生きて居られよう。』

こサルウヂンは確りこ考へた。『これから後生活して行くためには、一切の過去を抛つて、全つきり今までのサルウヂンでない人間にならねばならぬ。だが、俺にはそれは出來ない……』

彼れは卓子に頭を強く落した。ゆら〳〵こゆらめく蠟燭の焰は陰慘にこの一室を照らした。彼れは死んだ人のやうに凝固したまゝ、何時までも身動きをしなかつた。

十八

同じ晩、サニンはソロヴィチクの許に立ち寄つた。年若いユダヤ人は一人ぼつちで、自分の離れの石段に腰を下し、人氣のない森こした庭に眺め入つてゐた。

彼れの異樣な顏付は、最初の一目で酷くサニンを驚ろかした。彼れは何時ものやうに馬鹿叮嚀でなくて、白い齒一つ見せる事すらしなかつた。暗い悲しみに堪えきれぬ眼には、思想が不安げな苦しみの形こなつてあらはれてゐた。

『今日は。』

こ彼れは沈んだ調子で、サニンの手を握りながら挨拶した。

サニンは何かしら彼れの胸中に變事の起つてゐるのを推察した。で彼れは石段の一つに腰をかけ、煙草に火をつけて長い間押し默つてゐたが、

『君は此處で何をしてゐるんです。』と聞いた。

『私は此處にぢつとかうしてゐるのです。粉磨場が出來て、風車のまはつてゐた頃、私は此處の事務員に雇はれてゐましたが、皆な何處かへ行つてしまつて、私だけが現に取殘されてゐるのです。』

『で、君は一人ぼつちで淋しいんだね。』

『いゝえ、此處は少しも私を淋しがらせん。私は此處と此處のために苦しめられてゐるのです。』と、ソロヴイチクは自分の胸と額を指ざした。

『それがどうしたのです。』

サニンはゆつくりと訊ねた。

『まあお待ちなさい。』とソロヴイチクは熱心に、次第高な調子で續けた。『あなたは今日人を打ちました、いや、あの人の生涯を滅茶々々にしてしまはれた樣なものです。どうかこんな事をいふ

私に立腹しないで下さい。私は此處に坐つて、今までその事ばかり考へてゐたのです。』

『君は僕が感情を害しはしないかと思つて氣を遣つてゐるやうだね。しかし僕はそんな事くらゐで感情なぞ害しはしないよ。僕のやつた事はやつた事で、若し自分の行爲が惡いと思へば、僕は自分で惡いと言ひますから、何でも訊ね給へ。』

『それでは貴方は、あの人を殺してしまつたやうなものだとはお思ひになりませんか。』

ソロヴイチクは昂つた語調をもつて訊ねた。

『大體に於てそんなことになるでせう。』とサニンは答へた。『あんな男は僕が殺すか、自分が死ぬるか二つに一つの道しかないのです。ところがあの場合、奴は心理的に機會を取遁してしまつたのです。つまりあまり酷く僕に遣り込められたものだから。』

『貴方は平氣で仰有つてゐるのですか？』

『「平氣」でとは何の意味かね、僕は牝鷄が締め殺されるのでさへ平氣で見てゐられない。まして相手は人間だ。叩くのは決して平氣ぢやありませんさ。兎に角よくない事だ。けれ共、僕の良心は平氣です。あれは單に偶然にすぎなかつたので、サルウヂンは運命的に傾きかけてゐたので

す。奴は氣狂で白痴も同じ人間で其まゝにして置いたらどんな眞似をおつ始めるか知れない。つまり僕は狂人に自己防衛をしたので、僕には何の罪もありはしない。』

『でも貴方は精神的にあの人を殺害されたではありませんか。』

『そこが運命で、僕をあんな場合へ行き合せた運命の神に訴へるより他はありますまい。』

『しかし、貴方はあの人の手を捉へて止める事が出來なかつたでせうか。』

サニンは頭をさげた。

『あゝいふ場合に理窟で物を判斷する餘裕があるものですか。考へて見たからつてそれが何になります。第一、僕にしたつて、永久に奴さんの手を捉へてゐる譯にはゆきませんからね。そんな事をしたとして御覽、それこそ奴にとつて、今一段猛烈な侮辱を加へることになつて來はしませんか。』

『それは……貴方の仰有るのが正當かも知れません。』

ミ、ソロヴイチクは沈痛な聲で言つた。『しかし乍ら、ごうしてあゝする必要があつたでせう。打つのを我慢なすつた方が、もつと善くはなかつたでせうか?』

『ごうしてです。奴を毆らねば奴から鞭打たれる處だつたのですよ。何時だつて、打たれる事なんかよくはありませんからね。』

『いえ、その私の言ふことをお聞き下さい。』ミソロヴイチクは慌てゝ遮つた。そして祈るやうな手付をして

『ごうもその方が、よかつたやうに思へるのですが……』

『奴に取つてはね、勿論左樣でせう。』

『いえ貴方に取つてもです……ごうかお考へなすつて下さい。』

『あゝ、ソロヴイチク君。』ミ、サニンは少しく不機嫌に言つた。

『君の言葉はまるで道德的勝利についてのお伽噺ですよ。』

ソロヴイチクはいきなり頭を抱へて、悲しげな聲で言つた。『私は馬鹿です。もう何も判斷することが出來ません。ごうして生活すべきかさへ、てんで見當がつかなくなつてしまひました…。

『ごうしてそれを考へる必要があるんです。鳥が飛ぶやうに生きて行けばいゝではないか。右の翼が動かしたければ右の翼を動かすさ。木を避ける必要があれば避けて通る……』

『しかし、それは鳥のお話で、私は鳥ではありませんのです。』

ソロヴイチクは眞面目顔に、頭を振つて『仰有ることは唯言葉だけに過ぎません。貴方は私に如何に生くべきかについて何も敎へて下さらない。誰一人、それを私に敎へて呉れやうとする人はないのです。』

『それはさうでせう。誰も生活の術を敎へてくれるものはありませんよ。生きるといふことは一種の才能で、そのタレントのない者は自ら滅亡せざるを得ない……』

『貴方はよく平氣で、そんな調子に生きて行けますね。何時でもそんな風にして暮して行けるのですか？』

と、ソロヴイチクは大きな好奇心をもつて訊ねた。

『いや。』

と。サニンは頭を横に振つた。『僕が多くの場合平氣だつたのは事實です。しかし深い疑惑に迷はされた時代もありましたさ。』

と、サニンは物思しい有樣で、一つの物語を話し出した。

それは、彼れの友人に、生れつき信仰心の強い基督敎徒の、イワン、ランデといふ數學科の大學生についての一挿話であつた。

その頃病學生のセメノワは、クリミヤで家庭敎師をしてゐた。彼れはひどく惡くて、肺患のため？　孤獨と貧苦の現實と死の豫想のために、絶望的な、實に悲劇的な生活のうちに苦しんでゐた。ランデはそれを知ると、直ちにセメノワの靈を救つてやらねばならぬと決心した。しかし彼れには旅費がなかつた。そこで彼れは千露里の長い道程を徒步で出發した。そして何處かで中途に倒れてしまつた。つまり友のために自分の生命を捧げてしまつた——といふ話であつた。

『で、貴方はどう思つていらつしやいます。貴方はランデさんとかを尊敬されますか。』

と、ソロヴイチクは、サニンの言葉の終りが待ちきれなかつたものゝやうに、眼を輝かして口急しく質問した。

『當時僕はおそろしく彼れの影響を受けてゐましたので、非常に魂を動かされました。が、その後になつて冷靜に歡察すると、あの狂信者の生活は不幸と貧苦そのものであつた事に氣付きました。』

『おゝ、貴方は何ごい事を仰有るのです。』

ソロヴイチクは文字通り叫んだ。『貴方にはその方の尊い体験を御相像なさる事さへお出來にならなかつたではありませんか。』

『あんな体驗は單純な一本調子なものですよ。彼れの生活の幸福は、一切の不幸を不平なく天命ごして諦める事に於いて成立ち、如何なる財寶も悉く拒絶する點に於いて彼れは精神的富を滿足させてゐたのです。いはゞ、彼れは自由意志からの乞食だつたので、ある畸形的な概念に生きてゐた夢想家であつたのです。彼れには自分すら解つてゐなかつたのだ。』

『貴方はそんな事を仰有つて、私がごんなに苦しむか相像されないのですか。』

『君はまるで神經衰弱者のやうだね。』

ご、サニンは呆れて注意した。

『僕の言葉が、ごうして君を苦しめることになつて來るだらう。』

『いゝえ、それは非常にです。私はその事ばかり考へて、考へて、頭が破れるほご痛いのです……一体何のために人間は生きてゐるんだか、ごうか私にそれを説明して下さい。』

『誰に――それが説明出來るものですか。』

『それでは未來のために生きることは出來ないのでせうか?』

『君、一切は空虛だよ。嘘無だよ。』

『ではランデさんは? あの人の……』

『死ご共に彼れの價値は消滅してしまつたのさ。』

『けれごも、あゝした人こそ人生を向上させるものであるごはお思ひになりませんか。あゝいふ人々には追隨者があらはれるものだごは……』

『何のために人生を向上させるのです。それが一つ、第二にはランデその者に生れなければランデの眞似は出來ない。キリストは偉大だつた。しかしながら、キリスト教徒は果して偉大かごうか?』

二人は默りこんでしまつた。

靜寂が四邊に迫つた。空高く燦める群星のみが、聲なき無言の囁きを交してゐるかのやうに見えた。ご、ソロヴイチクは何やら口の中でぶつ〳〵呟き出した。彼れの呟きは、サニンに身顫ひ

を起させたほど物凄い異様なものであつた。
『何を、君は言つてゐるのだ。』
『どうか私に説明して下さい。』と、ソロヴイチクは低い聲で訊ねた。『若し何處かに、人は何のために生きて行くのか、その解決に苦しみ抜いてゐる人間があつたとしたら、その人間は死んでしまつた方がましではないでせうか?』
『さあ……』
と、サニンは夜陰に若いイスラエル人の心が、忍びやかに自分の方へのびて來るのを鋭ごく感じながら言つた。
『さういふ人は死んだ方が幸福でせうね。苦しむのは無意義ですからね。』
『おゝ! 私もさう思つてゐました。』
とソロヴイチクは力をこめてサニンの手を握つた。闇をすかして見える彼れの顔は、生きた人間のそれではなかつた。サニンはある不安を感じたので立ち上つた。そして
『死人にとつて最もいゝ安息所は墓だよ。左樣なら。』

と、言ひ捨てると彼れは石段を降りて行つた。
……あんな風にして生きてゐるのも、死ぬのも同じ事だ。奴、今日やらなければ明日はやるに決つてゐる……
彼れは木戸を開いて町へ出た。
並木路にさしかゝつた時、遠くの方から駈けつける唯ならぬ物音を彼れは聞いた。誰とは知らず、夜の暗がりを衝いて、泣くでもなく喚ぶでもない聲を立てながら、慌しく駈けこんで來る……次第に近く! 彼れの方へ……
『どうしたんだい。』
彼れは聲高く訊ねた。
走つてゐた男は彼れの目と鼻の眞近でピタと止つた。彼れは愚かしい兵卒の顏をそこに認めたが。兵卒は嗄れ聲で何事か呟くと、再び取り亂した足付で一目散と闇の底に消え去つてしまつた。
『おや?……彼奴はサルウヂンの從卒のやうだつたが?……』

寒感がさつと彼れの頭を掠めた。

『奴、ピストルでやつたな！』

彼れは暗い夜氣の中で身動きすらしないで立ちつくしてしまつた。が、間もなく彼れは頭を搖り。にやりと薄笑ひした。そして、しつかりした目付で前方を見据へて言つた。

『ちつとも俺に罪はない……一人殖へて一人減つたまでの事だ。』

そして闇の中をずん〳〵大跨に歩るいて行つた。

十九

どんな些細な事件が起つても、すぐ隅から隅へ知渡つてしもうこの小さな都會では、二人の若い男が一夜のうちに自殺した事實はすぐ知わたつてしまつた。

彼等のある者は、こんな調子で行つたら、今にこの町には青年がゐなくなつてしもうであらうと、大袈裟な驚嘆の言葉を放つた。

そして誰もがサルウヂンとソロヴィチクの自殺の原因について、勝手な意見を叩き合つた。

彼等の解釋は區々であつた。そして大部分の、自殺者と個人的關係を持たぬ人々までが、士官がピストルで頭蓋骨を叩き破つた原因はサニンにあるのだと判斷した。

が、若いユダヤ人の死に至つては、彼れを知つてゐる少數の者達にとつてすら、實に不可知な黑い謎を投げつけたのであつた。

彼等のある者は、解らないなりにも

『奴は屹度氣が狂つたのだらう。』

『いや、彼奴は哲學者だつたのだ。思想的に苦惱して人生を嫌惡したに違ひない。』

なぞと主張した。さればこて、果してソロヴィチクの自殺が狂氣の沙汰からか、思想的死だとすれば、如何なる思想が彼れを死に至らしめたか。その確かな例證を擧げ得るものは勿論一人もありはしなかつた。

そして、サニンが問題の中心として、すべての人の注目を鍾めた事は事實である。

ユリイは、軍樂隊の吹奏する葬りの曲について、喪章をつけた馬車や、喪服の行列やが、數多

い花輪と一列にして、悲しくも物靜かに通りすぎて行くサルウヂンの葬儀を窓から見送つた。彼れは深い哀愁に打たれてしまつたのであつた。

夕方、彼れは長い間シナと一緒に散歩した。彼女の美しい、戀する女のやうな眸や、彼れの方へ接近してくる美しい肉体を絶えず快よいものに感じ乍らも、彼れは葬式のことで氣持を暗くしてゐた。

『本當に怖ろしい事です。』

彼れは緊張した黑い眼をぢつと下に落して言つた。『サルウヂン君が急に死んでしもうなんて……あんなに活潑な、明るい性格をした士官が一夜のうちに此世の何處にも居なくなつてしまつたのです。永遠に生きてゐるものゝやうに思はれてゐたサルウヂン君はもう居ないのです。もう決して出ては來ません。棺の上にのせてあつた。あの軍帽……』

ユリーは重々しく口を噤んで地上を見た。

シナは輕快な歩調で彼れと肩を並べて歩みながら、男の言葉に注意深く耳を傾けてゐた。が、彼女は自殺者のことなぞ考へてはゐられなかつた。彼女の若々しい肉体は、その全身でユリイと

の接近から來る感能の快樂を吸ひとらうとのみしてゐるのだつた。とはいへ、彼女は彼れに媚びてその歡心を求めやうとする無意識的な心から、憂はしい振を裝つてゐたのだ。

『え、悲しかつたわねえ！……それにあの樂隊が……』

『僕はしかしサニン君を攻擊出來ません。』

ユリイは不意に言ひ出した。『あの場合、サニン君として、あんな態度に出るより他に方法がなかつたでせうからね、けれども怖るべきは、二個の人間のとる可き道が一時に塞つて、どちらかの一人が讓歩せねばならぬやうな立場に至つた事でした。そして偶然にも勝利した者が、一人の人間を平然とこの地上から抹殺して置きながら、恰かもそれを當然であるかのやうに……』

『え、？　正當？　左樣よ、サニンさんは正當だわ。』

『いえ、僕は怖ろしい事だと言つてゐるのです。』

ユイリは彼女の生々して來た顏を眺めた。そして嫉妬のために憎惡を感じた。と、シナはおそろしくまごつた。彼女の眼は俄かに光を失ひ、顏は著しい紅色を帶びた。

『どうしてです？』

と、彼女は落付なく訊ねた。

『何故こいつて、あれが若し他の人であつたとしたら、其人は必らず良心の吐責を受けるでせうに、あの男はまるで何事もなかつたかのやうに、俺に罪はない、と涼しい顔をしてゐる。果してこれが罪科の問題にすぎないでせうか？』

『では、どんな問題でせう。』

シナはあやふやと質問した。頭を深くたれ、彼れが立腹せぬやうにと氣遣ひながら……

『それは解りません。しかし人間は野獣になる權利は持つてゐない筈です。』

と、ユリイはぶつきら棒に答へた。

そして其まゝ二人は長い間默りこんで歩るいた。シナはその沈默のうちに自分の氣持がユリイから遠く離れてしまつたこと、一寸の間に彼れに對する特別な情緒が何處かへ行つてしまつた事に苦しんだ。

彼れは素つ氣なくシナに別れを告げた。彼れの態度は、不滿と恐怖と、たよりない侮辱の惱ましい氣分を柔らかい少女の胸に刻みつけさせるに充分であつた。

歸宅すると、ユリイは家族の者達が、ソロヴイチクが飼犬の鎖を取つて犬を解放してやり、その鎖でもつて縊死した噂を面白相に語り合つてゐるのを聞かされた。

彼れは自分の部屋にさがると、縊つた若いユダヤ人の事について惱まされた。

『どうして人間はかう孤獨なのだらう。あのソロヴイチクは、生きてゐる間、全世界のために苦しんでゐたのだ。一切のものを犧牲にしやうとする偉大な魂のために苦しんでゐたのだ。しかるに何人も……この俺ですら彼れを認めず、尊敬の代り侮蔑の眼で彼れを眺めてゐたではないか……彼れは聖者だつたのだ。それを俺達は皆なで馬鹿にしてゐた……』

ユリイは罪深い責めに惱まされた。苛立つ心は何事も手につかず、彼れは室内を大股に彼方此方と歩るきまはつた。

『……おゝ、ソロヴイチク！　ソロヴイチク！　あの小さな憐れむべきユダヤ人は、全く人生が解らぬものときめて、これを下らないとは思はなかつた……いや、何だ、遲かれ早かれ俺も同じやうにこの世を去るに決つてゐる。何故こいつて、死の他に出る道がないからだ。……何故なのか？……何故なのか？……』

ユリーは行詰つた。よく解つてゐるやうであつてしかも、何故他に道がないのか、答ふべき言葉を彼れは知らなかつた。と疲れきつてゆく頭は思考の力を失ひ、彼れの思想は麻痺されてしまつた。

『下らない事だ！　みんな下らない事だ！』

彼れは腹立しげに大きく叫んだ。そして、

『こんな事を考へてゐたら、俺は氣が狂ふ……』

と、恐ろしげに頭をぶる〳〵と振つて窓のところへ行き鎧戸をおし開いた。

既に黎明を來さんとしつゝある空は白みかゝつて、大熊星座の七つ星の色は蒼ざめ。まるで水晶のやうな明星は、明らかな濕みを帶びた光芒を、天の一角に靜かに放つてゐた。冷氣をふくんだ風は東から吹いて來て、朝霧は仄白い流れとなつて漂つてゐた。

自然のすべては美しく且つ靜かであつた。苦惱する彼れなぞには少しも頓着しないもの丶如くに。

二十

朝はまだ素敵に早かつた。

サニンとイワノブとはつれ立つて町を出かけた。低いところを轉けてゐる太陽は、露を炎のやうに燃やしてゐた。そのために影では草は灰色に見えた。道の兩側につらなつてゐる柳の木の下を、赤や白の頭巾をかぶつた巡禮者達が、ぞろ〳〵と修道院の方へ歩いてゐた。

と、遠くでは修道院の鐘が、朝の爽やかな空氣を衝いて、涯しない曠野の隅々までも鳴り響いた。道には、三頭馬車が鈴の音を立てながら通りすぎた。巡禮者達の粗野な聲々が早口に聞えたりもした。

『少し早すぎたね、』

とイワノブが言つた。

サニンは快濶に周圍を見ました。そして

『ぢや、少し待つことにしよう。』

で、二人は垣の根もとの砂地に腰を下して、旨さうに煙草を吸ひ始めた。

車をひいて町へ行く百姓、空車に乗つてゐる百姓女やその娘達は、彼等を眺めて、冗談らしい眼付で牒し合せたり、高いひやかし笑ひを浴せかけたりした。イワノブは一向注意しようとしなかつたが、サニンは女達に微笑で答へた。すると、彼女達は金屬性の高い聲で無遠慮に笑ひころけた。

暑くなつて來た。

と、絲色をした屋根の、白い階段を持つた酒屋の前に、チョッ着の、脊の高い男があらはれたその男は大きな欠呻をしながら、錠をがちや〳〵鳴らした扉を開いた。眞赤な頭巾をかぶつた女が一人、すぐその後から、するりと中へ姿を消した。

彼等はそこへ走り寄つて、ウオトカを買ひ求め、眞赤な頭巾の女から、青々とした眞新らしい胡瓜を分けて貰つた。

『おや、君はごつさり持つてゐるね。』

イワノブは驚ろいて言つた。サニンが財布をとり出したのを見て、

『前借だよ。』

サニンは笑つた。彼れはある保險屋の書記に雇はれたのである。そしてそれは幾干の金を得ると同時に、彼れの母をして、世間に對する體面から、ひどく否難されたところのものであつた。

彼れ等は再び道路に出た。

『素晴らしくいゝ氣持だ。』

『うん、その上靴を脱いだらもつと素敵だらう。』

『やれ、やれ！』

で彼れ等は素足になつて砂地を歩るいた。微かな溫みをもつた砂の中に、指先が埋もれる感觸は、此上もないいゝ氣持であつた。

やがて牧場になつた。

そこには草が露をふくんでゐて、その上を素足で踏むのが、また堪らない快よさであつた。

『何ていゝんだ。』と、イワノブは言つた。

『生きてゐればこそだ。』サニンと合槌を打つた。

牧場がつきると、又前と同じやうに、空車が通つたり、百姓女達の高笑ひのする街道になつてゐた。その先に木立があらはれ、葦があらはれ、白銀色に光つてゐる水を距て、修道院の丘が盛れ上つてゐた。塔上の十字架は、日光をうけて黄金色の星のやうに燦然と輝いてゐた。

川岸には小舟が幾艘も繋がれてゐて、さま〳〵なチョツキやシャツを着た百姓達が構へてゐた二人は長いことか、つて、櫂擡半分に値切つた上で小さな一艘を借りた。

擢をイワノブが、そしてサニンが舵を握つた。小舟は岸に沿ふて辷り出した。

『おい、此の邊につけやうか。』

草深い岸邊のあたりに來た時、イワノブはかう言つた。

そして小舟は岸邊につけられた。草の深みから小鳥が驚ろいた羽音を立て、飛び出した。イワノブは岸に跳り上ると

『あ、人の全種族は地にみてり。』

と力强い低音で歌つた。

サニンも笑ひながら跳ね上つた。草は彼れの膝のあたりまでかくしてしまつた。

『こんない、所は又とあるだらうか。』

と、彼れは愉快相に叫んだ。

『何處だつて——太陽の下なら皆い、のさ。』

イワノブはかう答へながら、船中のウォトカや胡瓜やその他の食物の包みを取り出した。そして、大きな木の幹の、柔らかい草の上にそれを並べた。

『ルクユラスがルクユラスのこころで食事をやるのだ。』と彼れは言つた。

『そして奴は幸福だ。』

とサニンが結んだ。

『こころが不足がある。』

とイワノブは冗談に悲しげな顔付をして『コップを忘れて來た。』

『そんな事が……何でもい、さ。』

と、サニンは光と熱と緑と、自分の敏捷な動作に滿足を感じながら素早く木に攀つた。そして

青々とした一つの枝をナイフで截り始めた。

枝はぱさつと靜かに草の上に落ちた。サニンは木の幹から飛び降りると、その枝で、皮を傷けぬやうに注意しながら、中を剝りぬいてコツプを拵へあげた。

で、彼れ等は草の上に坐つて、ウォトカを飲み、空腹のまゝに眞新らしい胡瓜を頬張つた。

滿腹した彼れ等は、今度は素裸になつて水中にとびこんで泳ぎ弄れた。そして岸にはひ上つては、端々しい草の上を轉げまはつたり、南洋土人の舞踏を滑稽に踊り狂つたりした。サニンは調子づいて、蜻蛉返りさへ打つて見せた。

『おい、ウォトカを飲んでしもうぞ。』

とイワノブは怒鳴つた。

で、二人は着物をきて、胡瓜を平らげ、壜を空つぽにしてしまつた。

『かうなつて來ると、ビールが欲いね。冷めたいやつをぐつと一息にやりたい……』

イワノブは恍惚として言つた。

『さあ、出掛けよう。』

『よし!』

二人は小舟まで駈足の競爭をした。そして忽ち船中にとび移つて漕ぎ出した。

『何て蒸暑いんだらう。』

サニンは舟底に長々と寢そべつて、太陽を眩しく仰ぎ乍ら言つた。

『夕立が來るかも知れないぜ。』イワノブは更に『こら!横着しないで舵をこるんだよ。』

『自分こそ漕げよ。』

サニンは言ひ返した。

イワノブは彼の方へ擢で水球をはじいた。

『有難う。』

と、サニンは言つた。

小舟が青々と繁る舟の傍らを通りすぎる時、若々しい女の笑ひ興じる聲を二人は聞いた。その日は祭日であつたので、町の人々は散歩に來たり、水浴をしに出掛けてゐたりするのであつた。

『娘達が水を浴びてゐる……』

ミ、イワノブは言つた。
『一つ探險してやらうぢやないか。』
『みつかるミ大變だ。』
『なあに――そこの葦の中へ舟をつけて……』
『止さう。』
『どうして？』
『だつて、恥しいや。』
『恥しい？　何が。』
『何がつて、相手が相手だもの、よろしくない。』
『貴樣は馬鹿だな。心の中では見たくて堪らないでゐる癖に。』
『でも、その……相手がその……』
『だから尙更だ。一緒に來いよ。』
『い、から、一人で行き給へ。』

サニンは舌打をした。『どんな野郎だつて、女の裸體を見たく思はない奴があるもんか。』
『それはさうだが……見たいのなら隱れてなんか……』
『隱れて見た方が一層魅惑的だからだ。』
成程――しかし危險だ。』
『純潔を守るこミがか。』
『うむ。』
『こころが我々にはその純潔が既に失はれてゐる。』
『こころで若し、君の眼が君を誘惑したら、そいつを刳り拔いてしまへよ。』
『馬鹿を言へ。神は刳り拔くために眼を與へたのぢやないよ。』
イワノブは肩をゆすつて笑つた。
『だから、何だよ。』ミ、サニンは小舟を岸につけ乍ら言つた。『君が女の裸體に接して、何等の情慾も起さなかつたら、その時こそ君は純潔な人間だ。僕は最先に君の純潔を賞讃するが、その前に病院に擔ぎ込まねばならぬやうな事になるだらう。しかしそれは君の內部にあつて、强ひて外

に押し出やうとするのを、鎖でつながれた番犬のやうにしてゐるやうな純潔だつたら一文の値もありやしないのだ。』

『だが、もしそれを自制しなかつたら、人間はどうなるだらう。』

『どうもなるものか。性慾の野放が人間を不幸にしたからといつて、性慾それ自身に罪があるんぢやないからね。』

『まあ、君の説に贊成して置かう。もうお談議は澤山だよ。』

『そんなら一緒に行くか。』

『でも……』

『貴樣あ何て馬鹿だ。もつと靜かに歩かなくちや……』

二人は殆んど匍ふやうにして、高い香氣の噎ぶ草の中を、かきわけながら靜かに進んだ。

『見給へ、それ！』

イワノブは夢中になつて言つた。

草の上に脱ぎ捨てられたスカートや帽子や、上着などは水浴者が町の令嬢達であることを思はせた。彼女達は、ある者は水の中で、ぱちや〳〵したり、滴の浴せつこをしてゐた。その丸々とした柔か相な肩や、腕や、胸のあたりを、水球は虹のやうにぼかしてゐた。一人、全裸體のまゝ岸にすつきりと立つてゐる女があつた。脊の高い、格好のいゝ、透きとほるほど白い皮膚をした彼女は、高らかに笑つてゐるところであつた。その笑ひが、彼女の胸と下腹部を輕く波打たせてゐた。

『おや！』

サニンは狂喜して言つた。

『どうした！』

イワノブは吃驚して思はず尻込みかけた。

『叱ッ……あれはシナだよ。』

『え、？　僕はうつかりして居た。何て綺麗な女だらう。』

『うむ……』

この時であつた。二人の聲を聞きつけたらしく、彼女達は俄かな笑ひ聲ともに騒ぎ出した。

シナは驚ろいてひらりつと身を跳らせて透明な水の中へ隠れてしまつた。そのバラ色の顔だけが水の面からあらはれた。

二人は、あたふたと葦の間を逃げ出した。

『あゝ……生きてゐればこそだ……』

と、サニンは手足をのばし、さて高らかにうたひ出した。

島の蔭より一筋に
川の大浪のたゞ中へ……

女達の笑ひ聲は、綠の木影の彼方から長いこと響いてゐた。

『夕立が來るらしいぞ。』

小舟に歸りながらイワノブは空を見上げて『おい急がうよ。』

『逃げたつて同じさ。雷雨からのがれる事は出來ない。』

空氣は死んだやうに、微動だにしなかつた。そして雨をふくんだ雲は低く舞ひさがり、あたりはいよ〳〵暗くなつて行くばかしだつた。

と、弱い光りがキラツと走つた。同時に一陣の風が颯つと吹き起り、大粒の雨の滴がボトリと小舟の上に落ちた。次の一滴はサニンの額にかゝつた。——と息をつぐ間もなしに俄かに木の葉がざわめき立て、水面に凄まじい音をはぢき返して雨が來た。

忽ち周圍は眞暗になつた。沛然として驟雨が降り募つてゆく。

『いゝ氣持だ。』

サニンは濡れ鼠のやうになつて快よげに言つた。

『惡くないね。』

イワノブは身を縮めながら答へた。

雲は薄らぎはしなかつたが、雨の脚は忽ち通り過ぎて小降りになつた。暗澹とした空を裂いて稻妻はきらめき走つた。

二人は小舟に乘つて廣い水上の方へと漕ぎ出した。その上空には暗雲が低く重々しく渦卷いてゐた。雷光は刻々としげく閃めき渡つた。

『うわッ！』

こ、イワノブは叫んだ。『そら鳴るぞ！』

と、一際強い稲妻が空を中央から二つに劈いたこ見る、凄まじい音響を立て、雷鳴がはためいた。

『おゝ……おゝ……』

サニンは大きな聲で叫んだ。

『おゝ――』

こ、イワノブもありつたけの聲で喚めいた。

稲妻がピカリこ光つて、サニンの眼を輝やかし幸福相な顏を照らし出した。

二十一

太陽はきら〳〵こして。まだ春の輝きを失つてゐないやうであるが、こころ〴〵、樹々の間には黄ばんだ色を見せ、捕へ難いしんみりこした靜かさの中には、既に秋の近寄つたここを感じさせてゐた。

ユリイは庭の小徑をぶらついてゐた。大きく開いたその眼は、空の青や、黄葉の木立や、靜かな小徑や、水晶のやうに透明な水なぞを、恰かも周圍にある一切のものが、この世の見納めでもあるかのやうに、もう決して忘れまい。深く胸の中に刻みこんで置かうこするもの、如く、注意深くそゝがれてゐた。

悲愁は彼れの心を浸してゐた。

その原因は解らないのだけど、一瞬毎に貴重な何ものかゞ、自分の躰を遠く離れて行くやうな氣持がしてならないのだつた。

『えゝ、どうにでもなれ。』

混濁した思想に惱まされる彼れはかう呟いた。

人生がよしんば如何なるものであらうこ、人生の過失について誰人に罪があらうこ、最後に襲ひかゝるものは暗い死の穴一つきりである。そこに運び去られた時は、既に、何故人は生活したかなぞこ評價するここは出來ないのである。

『すべては同じ事ではないだらうか。俺が大學者になつて死のうが、偉大な思想をもつた藝術家

になつて死のうが。また乞食をして行倒れで終らうが、皆な一つでつまらない事だ。』

金色にきらめく日の透明な靜けさの中に、彼れは早くも凋落する人生の秋の哀れさを痛々しいまでに感じたのである。そして、この靜寂の中にある自分自身といふものが、あり〳〵と見えるやうな氣がしたのである。

『あ、、リヤノ〳〵が駈けて來る――』

幸福なリヤリヤ、あれはまるで蝶のやうにその日その日を生きてゐる。あれには何も考へる必要もないのだ。俺もあれのやうに心配のない、苦しみのない人生に生きることが出來たら……

『ユラさん、ユラさん。』

と、彼女は三足許のところまで來てから、歌ふやうな響きのいゝ聲で兄を呼んだ。その右手の指の間にはばら色の可愛らしい封筒が挾まれてゐた。

『シナさんからお手紙よ。』

ユリイの頰はひどく赧くなつた。

彼女が、郷愁ひながら家の方へ去つた後で、彼れは戀人からの手紙を、胸を躍らせ乍ら開いて

讀んだ。

そこには、今晩修道院に來てほしいと書いてあつた。伯母が聖体（斷食）をうけるので、自分も一緒にお伴をするのだが、伯母は終日外へ出られないから、自分は退屈だ。だからその間に貴方といろんな話をしたく思ふ――と書いてあつた。

讀み終つた彼れの心は、今まで考へてゐた灰色の思想とは似ても似つかぬ、幸福の溫い羽搏きの中に沈んでしまつた。小鳥となつて、この躰が、太陽の光りにみちた空の青みを、涯しなく飛んでゐるやうな氣持がして來るのだつた。

夕暮れを待つて彼れは馬車を修道院へ駈けつけた。舟つき場で馬車を渡船とかへ、彼れは丘上に黃金の十字架の聳えるそこへと急いだ。

修道院の境内は、まるで教會堂の内部のやうに靜かであつた。ポプユラ樹が行儀よく嚴かに立ちならび、黑衣の僧侶達が、恰かも夕べの影のやうに、黑い、裾長い衣をひいて靜かに歩るいてゐた。會堂の正面入口のところでは、祈禱の蠟燭がかすかにゆらめき、何とも捕へ難いほのかな匂ひが、あたりを立てこめてゐるのだつた。

『やア、今日は。スワロージツチ君』

後から呼び止めた者があつた。

ユリイは振り返つた。と、そこには、シャフロブと、サニンとイワノブと、ピョートル、イリイッチの四人の顔が見られた。

『僕達も青年會へやつて來た處ですよ。どうです、一緒に行きませんか。』

と、シャロブは近寄ると親はしい眼付で言つた。

『有難う。だが僕は連れがありますので。』

ユリイは迷惑らしく答へた。

『いゝぢやないか。行かうよ。』

『折角ですが……いづれ後からお伺ひしますから。』

ユリイは辛抱しきれなくなつて言つた。

『ぢや仕方がない。待つてゐるから後から來給へね。』

『えゝ屹度。』

彼れ等は笑ひながら遠去つて行つた。四邊は再びひつそりとした靜寂に還つた。ユリイは帽子を取つて會堂には入つた。

暗い圓柱の一つをまはると、彼れはすぐシナを認めた。彼女は鼠色の上着に、女學生のやうに見える丸い麥藁帽をかぶつてゐた。

ユリイの胸は奇しい震へに刻まれた。彼女のすべてが彼れには此上もなく懷しかつた——その短衣も、その帽子も、その眞白な頸筋の上で結ばれた黑髪も、女學生らしい樣子も——

彼女はユリイの近寄つたのを感じて振かへつた。彼女の俯向けた暗い眼には、四邊を氣遣ふ喜悅の色がひらめいてゐた。

『今日は。』

ユリイは聲をひそめて言つた。と、近くにゐた信者の二三人が振り返つた。彼れはハッと赧くなつた。

祈禱中であつたので、彼女はもう彼れの方を見向ふともしないで幾度となく熱心な十字をきるのだつた。が、彼れは彼女が自分の事ばかり考へてゐるのを知つた。

會堂のほの暗い闇の顏、祈禱の讃歌を朗讀する奇しい聲々。ちら〳〵と燃え上る大蠟燭の光り信者達のもたらす重々しい溜息、戸口の方に起る低い跫音。彼れをとり捲くこれらの嚴かな沈重なほの暗さは彼れの心に強い感動を與へた。

彼れは、黑い髮に半ば蔽はれた眞白い頸や、黑い上衣の下に感ぜられるなよやかな彼女の腰のあたりに、ぢつと貪るやうな瞳を凝らしてゐた。と、幸福が彼れの脊筋をぞつと流れた。

と、出拔にこんなことが彼れの頭にうかみ上つた。

二人がまだ無邪氣な子供同志であつた時、自分達は何處かで會つたことがあるのだ。その後の永い間別れ〳〵になつて生活してゐたのが、再びまためぐり合ひ、二人が互ひに愛し合ふやうになり、彼女は彼れのために着物を脫いでその裸體を彼れに獻げようなぞとは、夢にだも二人は思はなかつたであらう……

この氣まぐれな空想は餘りに思ひがけなく頭にうかみ上つたものであつたので、彼れは髮の根まで眞赤にして恥しさと喜しさを同時に感じたのである。

と、彼れの空想のうちで裸體とされた彼女もまた、彼女がユリイを愛しると同じやうに、ユリ

イが自分を熱愛して呉れるやうにと神に禱つてゐるのだつた。かうした彼女の、何か心を淨めるものが、女から男へと傳つて行つたのであらう、淫らな考へは何處かへ去つて、感激と愛の涙がユリイの兩眼に溢れた。

『主よ。果してあなたが存在なさるものならば、この少女がここしへに私を愛し、私もまたここしなへにこの少女を愛しるやうに惠み給へ。』

と、彼れは興奮して神に祈つた。

『彼方へ行きませう。』

と、シナは私語くやうに彼れに告げた。

そしてそつと會堂の入口を脫け出して行つたのであつた。

二人は肩と肩をならべて境內を通り、古ぼけた潛戸を開いて山の斜面へ出た。

そこには人の氣勢らしいものもなかつた。そして古ぼけた小塔のある白壁が、二人を世の中の人々から引き離してくれるやうに思はれた。

二人は無言のうちに斷崖の端まで行つた。何かしらせねばならぬ事があり乍ら、互ひの小心か

ら敢てそれを爲し得ないやうな氣持を二人は味はつてゐた。

と、シナが頭をあげた。突端に彼女の唇は、思ひがけない簡單さでユリイの唇の上に蓋をしてしまつた。彼女は眞蒼になつて戰慄した。が、ユリイは無言に彼女を抱きしめた。彼女の柔らかい、溫かな肉體を、彼れは生れて始めて手の中に感じたのである。

四邊は靜寂を破らなかつた。そして二人には、全宇宙が森嚴な寂寞の中に停止してしまつたかのやうに思はれた。

シナはそつと身を離して、かすかな笑顏で甘々しく言つた。

『伯母さんが氣がつくといけませんから待つてゐて頂戴、私すぐ歸つて來ますわ。』

そして彼女は會堂の方へと駈け出した、後にのこつたユリイは、草の上に腰を下し、頭髮を撫で上げながら考へた。

『かういふ事は實に間拔けたやうでゐて、この上もなく美しいものだ……』

シナは潛戸の外側まで來ると立ち止つた。彼女の皷動は奇しく騷ぎ、顏は焰のやうに火照つた彼女は片方の手を波立つ胸におしあて、機械的に壁に靠れて眼をとじた。

二十二

『もう歸つて來相なものだのに。』

心臟は亂調子に嗄りはためき、ユリイの五體は緊張して彈ぢきれ相であつた。

かくして、彼れは、遠くに嘶く馬の聲や、川の方から來る鵜鳥の羽搏きや、曠野に明滅する灯火に瞳をとられたりして待つてゐた。

と、急がしい足音と衣摺れの音が彼れの耳に傳はつた。『來た!』と彼れは本能的に心に叫んでわな〳〵と身ぶるひした。

シナは息をはづませながら彼れの眞近に立つた。ユリイは振返ると同時に生じた力强さをもつて彼女の體を抱きあげて草の上へ運んだ。

『落つこちてよ。』

幸福と羞恥にシナの聲は咽び喘いでゐた。

再び彼れはその胸にシナの體を密着させた。と、彼れには彼女が一人前の女に思へたり、子供

のやうに小さな娘に思はれたりした。裾衣をこほして、彼れの手はシナの足に觸れた。と、その意識に彼れはひどく驚ろいた。

下の木立は眞黑であつた。

ユリイは彼女を草の上に降して、自分もその傍に坐つた。ところが其處は斜面になつてゐたので、二人は並び合つて横になつた形になつた。ほの暗い夜天の下で、彼れはシナの熱い唇を探じだし、精神を錯亂させてしもう熱烈な接吻をもつて彼女を責めさいなんだ。

彼れの手が、○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○

『あなた、私を愛して下さる？』

彼女は息をきらしながら聞いた。と、その囁きは、森の中から來た神秘な聲ででもあるやうに異様な響きを傳へた。

『――俺は何をしてゐるのだ。』

突然、ユリイはぎよつとして自分の心に訊ねた。

と、氷のやうなものが、彼れの熱した頭を冷却してしまつた。

シナは恍惚として其の全身を彼れの方へさし延べた。と、彼れの俄に改つた表情を見ると、彼女ははつとして堪え難い羞恥に全身を火のやうにしながら、手早く着物をひき下して坐りした感情はユリイの身内に激して擁着した。此の地點まで來ながら、今一歩突込んで行き得ぬのが彼れには滑稽でもあれば不滿足でもある――で、彼れは拙い乍ら同じ事を繰返さうとして彼女をひき倒した。彼女は無器用に、これもまた如何にすべきかその方法に思ひ暮れて身を防いだ。數秒間この小競合は續けられた。

ユリイは、かうした事をしてゐる二人が滑稽で、醜惡で、唾棄したいやうな氣がした。で、將に彼女が彼れに降服しようとした刹那に、彼れは彼女を離してしまつた。

シナは追ひつめられた獸みたやうに、せい／＼息をきらしてゐた。

『もの私參りますわ。遲くなつては……』

彼女は哀れみを乞ふやうな調子で低く呟いた。

――どうすればいゝのだ。俺は……俺は……

ユリイは冷汗をかきながら自分に訊ねた。

二人は立上つた。が、互ひに顔を見るのを憚り合つた。ユリイは今までの無器用さを蔽はうとして、靜かに彼女を抱きしめた。と、至つて幽かではあつたが、彼女の心の中には、彼よりも自分の方が強いものであるかのやうな、母親らしい感情が湧いて來たのであつた。

『では左樣なら……明日、私の家へいらつしやいな。』

彼女は強く、それは若者が激しい眩惑を感じたほどの強い接吻を與へて去つた。

『何といふ事だ！』

ユリイは暗闇を別館の方へ赴きながら考へた。

彼れはあの純潔な少女を、野獸のやうに穢さなかつた事にひそかな誇らしさを感じた。とはいへ、彼れの心の中は、漠然とした物足りなさが憂愁の形をなして彼れを惱ましつづけてゐたのである。

『俺は生きてゆく價値ある人間なのか？』

彼れは出拔の絶望に襲はれて、かう自分に訊ね返した。

二十三

修道院の別館には、町の青年會がある筈になつてゐた。ユリイは廊下で出會つた頑丈相な僧侶から會場を敎へられて其處へ行つた。

煙草の煙で朦々としてゐる七號室ではシヤフロヴとイワノブが、人生は不治の病氣だといふやうな事について激しく論じ合つてゐるところであつた。

彼れは一同の歡迎をうけて仲間には入つた。

議論は、幸福だとか、神の問題にわたつて、いつ解決されるものか皆目見當がつかない程に混線して行つた。彼れ等は大概醉つてゐた。自然語氣の荒々しいのを免れる事は出來なかつた。

サニンにとつて、それらの愚かしくも下らない思想は、聞いてゐるだけでも欠呻の種であつた。彼れは暢氣相に煙草を咥へながら一人で庭に出て行つた。

と、青黑い夜の空氣が柔らかく、火照りきつた彼れの體をさました。月はその黃金の卵のやうな形を、森蔭からあらはしかけてゐた。光は暗い大地の上を音もなく辷り照らした。

さ、彼れは、恰かも獸が忍んで來るやうな低い足音を草の中に聞き、聽てほんやりした小供の影をそこに見出した。

『誰だい。』

『シナ先生の所へ行くのです。』

跣足の子供は答へた。

『何用で？』

『手紙を持つて參りましたので……。』

『あゝ左樣か。その人なら別館の方だ。彼方へお廻り。』

再び野獸のやうな足音を立てながら、跣足の子供は去つた。サニンはゆる〳〵とその後をつけて行つた。

窓の中に、肌着一枚で立つてゐるシナの横顏を間もなくサニンは發見した。彼女はぢつと伏目になつて何か考へ事に耽つてゐるらしい樣子に見えた。

シナはユリイの事で胸を一つぱいに滿されてゐるのであつた。深い〳〵喜びをもつて、彼女は

今日始めてユリイのするがまゝに身をまかせた情景を思ひ出してゐたのである。あの時に感じたいひ表はすことの出來ぬ、魂が遠くなるやうな幸福が、幾度となく、幾度となく心の中に思ひうかんで來る……

『私のいゝ人、私のいゝ人。』

彼女は熱くなつたり寒くなつたりしながら彼れを要求して止まなかつた。で、彼女の睫毛がふるへ、ばら色の唇が綻びるのをサニンは再び眼にした。

室の扉をノックする音がした。例の子供が手紙を持つて來たのである。

手紙はヅボブからのもので、明日視學官が學校へやつて來る事になつたから、是非今晩中に歸つて來てほしいとの用件であつた。彼女は當惑したが、伯母の許を貰ひ、子供と一緒に歸ることにして庭へ出た。

夜は青黑く柔らかに彼女を包んだ。

『まあ、何ていゝ匂ひでせう。』

さ、彼女は燭言つたが、その突端にサニンに突きあたつて思はず叫聲を立てた。

『僕ですよ。』サニンは答つて答へた。『何處へいらつしやるんです。こんなに遲く。』
『暗くつて失禮しましたわね。町へ歸りますの。』
『貴女お一人で？』
『いゝえ、この子供と……この子は私の騎士ですの。』
『騎士！』
と、子供は足を鳴らして威張た振をした。
『それぢや僕が舟で向ふ岸まで着けてあげませう。陸地を行つたのでは大變廻り道ですからね。』
とサニン。
『それでは畏れ入りますわ。』
シナは得体の知れぬ不安を感じて謝つた。
『渡して貰ふこいゝや。堤の上は酷い泥濘ですからね。』
と、子供は自分の跣足を見せた。
『さうだわね……それぢやお前は教會堂に來てらつしやるお母つさんの處へお出で。』

『だが、先生一人では向岸の原つぱが怖いでせう。』
『僕が町まで送り屆けてあげよう。』
とサニンが注意した。
『それがいゝや。ぢや先生、左樣なら。』
と、子供は灌木の彼方へ行き去つてしまつた。二人きりになつた。
『僕の腕におつかりなさい。でないと山から辷り落ちますぜ。』
サニンの要求に彼女は胸騷ぎを感じた。そしてうすいシャツを隔て、組み合した彼れの腕は鋼鐵のやうな觸感を彼女に與へた。
暗い闇の中を、一歩毎に互ひの肉体の彈力と溫味を感じながら、彼等は森から川の方へと降りて行つた。
『まあ、何て暗いんでせう。』
『僕は夜の森が好きですよ。此處で人間は平常の假面の脱いで、一層大膽に、神秘的に、一層興味深くなつて來ますからね。』

土が足の下で崩れた。二人は倒れないばかりになつた。川岸についた。サニン達の乘つて來た小舟は、滑らかに光る水面に描かれたやうに浮き上つてゐた。

二人は舟に乘り移つた。月はゆら〳〵と水の中に碎けた。

『私に漕がせて下さいな。漕ぎきつてよ。』

シナは我慢しきれぬやうに言つた。

『い、でせう。お漕ぎなさい。』

小舟は川岸につれて流れた。シナは上身をしやんとして坐り、手を高く前に突き出して、力弱く櫂を操つた。サニンは舵を握つて、彼女の胸を、腕を、一切を忘れて狂氣のやうに抱擁したくなるその艶麗な若々しい肉體を飽くことなく貪つてゐた。

月は彼女の白い顏を照らして、一種物語の中の人物のやうな幽玄な感じを彼に與へた。

『なんて美しい夜でせう。』

シナは周圍に眼をくれながら言つた。

『美しいですね。』

サニンは穩かに答へた。

と、不意に彼女は聲高に笑つた。そして、

『妾、ひよいつとこんな氣持がして來ましたわ。帽子を水の中に拋つてしまつて、髮を解いて見たい……』

『解いて御覽なさいよ。』

サニンは一層穩かに言つた。

が、彼女は急に羞んで口を噤んでしまつた。が、暫て取つてつけたやうに、

『貴方はユリイさんとは古いお馴染？』

『い、え。何故？』

『何でもありませんけれど……あの方本當にしつかりしたい、方ですわね。』

サニンは笑ひながら彼女を見返した。

『さう……です。ね。』

『あら本當よ。あの方は大變苦しんでゐらつしやる御樣子ですわ。』